

十九世紀長崎南画壇の片影

——鉄翁祖門の山水画と縮図冊

王 紫沁

はじめに

田能村竹田（一七七七一—一八三五）は、『山中人饒舌』（一八三五年刊）で「又有称漢画者、亦分数派、曰京派、曰撰派、曰江戸派、曰長崎派、一長一短互有得失（又は漢画と称するもの有り、亦た数派を分つ、曰く京派、曰く撰派、曰く江戸派、曰く長崎派、一長一短、互いに得失が有る）」（書き下し文は筆者作成、以下同）と、長崎派という概念を提示した。かつて竹田は「長崎鎮、華夷交通転貨処、故土民富饒、家給人足、治平日久、漸嚮文教、加之清商内崇尚風雅、善詩若書画者往々航来（長崎鎮は華夷が通交して転貨の処、故に土民は富饒なり、家

給人足、治平の日久しければ漸く文教に嚮う、しかのみならず清商は内に風雅を崇尚し、詩若しくは書画を善くする者は往々にして航つて来る。）」（『竹田莊詩話』、一八一〇年自序）と、長崎における風流の繁栄ぶりを記していた。唐通事の遊竜ゆうりゆう梅泉ばいせんから始まり、長年の間、長崎文化人と交信していた竹田は、文政九年（一八二六）、五十歳のときに長崎を訪れ、一年ほど滞在した。さらに竹田は『竹田莊師友画録』（一八三三年成）において、長崎で交わった文人・画人を十五人も記録しており、「長崎派」の構成を示している。

二十世紀初期に書かれた美術史、例えば藤岡作太郎の『近世絵画史』（二九〇三年刊）や梅澤精一の『日本南画史』（二九一九年刊）にも、竹田が提示した分派の構図が引き継がれている。梅澤精一は長

崎について、「華山、竹田、椿山の歿後は、殊に芸苑の中心と為り、昔日の盛観を来し、笈を長崎に負ひ、從遊する者頗る多かりき」と高く評価していた。²しかしながら、「長崎派」の内実が明らかにされないまま、この四派分けの画壇構図は後の南画の衰弱につれて、次第に江戸・京、すなわち二中心と、中央―地方の構図に収斂していった。

戦後、自由な気質を重んじる南画研究では、明清画に忠実な画風を低く評価する傾向が見える。黄檗美術と南蘋派^{なびんぱ}が見直される今日でも、長崎南画の研究は全体的に不振であり、郷土史外部からの関心がほとんどないとも言える。近世の明清画受容における長崎の位置付けは対外交流の窓口として定着しているが、長崎ではどのような書画活動が行われていたのか、その詳細はいまだに不明なところが多い。

本論はこの問題を念頭に置き、長崎南画三筆の一人である鉄翁祖門に焦点を当てる。鉄翁の美術活動を考察することを通して、長崎南画の一端を明らかにし、そこから近世の画壇構造を見直す視点を提供したい。

鉄翁の先行研究では、郷土史研究の成果として永見徳太郎『長崎の美術史』（一九二七年刊）³、古賀十二郎『長崎画史彙伝』（一九三四年脱稿）⁴が挙げられる。渡辺庫輔の未刊手稿『祖門鉄翁』『鉄翁門人』（年代不明、長崎歴史文化博物館蔵）には鉄翁にまつわる史料が多

く収められ、またそれらに基づく『鉄翁逸雲梧門梅泉墨酣年譜』（年代不明、長崎歴史文化博物館蔵）が最初で唯一の年譜であり、鉄翁研究の基礎資料となる。他に、個別の研究も散見される。⁵さらに郷土史の外からの関心として、鶴田武良による書簡と作品の紹介がある。⁶このように、鉄翁の経歴にまつわる資料は整理されているものの、その画業の全貌についてはいまだに十分に研究されていない。そのため本論では、鉄翁の画風の変遷、及びその背景となる書画鑑賞・学習の内容に着目し、彼の制作活動を全般的に考察する。

一、鉄翁祖門の生涯と名声

鉄翁俗姓は日高、幼名は三五良、名は祖門。通称鉄翁祖門または日高鉄翁。鉄翁は寛政三年（一七九二）二月十日、長崎銀屋町にある貧しい紺屋に誕生したと言われている。⁷銀屋町で幼年時代を過ごした後、日高家は磨屋町に引っ越したらしい。⁸寛政十三年（一八〇二）正月、父日高勘左衛門が他界した。⁹僅か十一歳の三五良は翌月、元号が享和と改まってから呉楓山（一七九四―一八三二）¹⁰の斡旋によって臨済宗建仁寺派の華嶽山春徳寺第十六代住持玄翁和尚に入門した。法名は妙玄である。¹¹

文政二年（一八一九）八月、玄翁の示寂によって看坊となり、翌年、三十歳で春徳寺第十七代住持となった。¹²継席のため、鉄翁は京都に

上った。その前に、石崎融思が鉄翁に送った《華岳山小景図》（長崎歴史文化博物館蔵）の題には「華岳山主妙玄沙、今茲庚辰暮春、遇謁于京師之本山、将秉法旆焉（華岳山主妙玄沙（門）、今茲庚辰暮春、京師の本山に于いて遇謁し、将に法旆を秉せんとす）」と記されている。

建仁寺の達書には「文政三庚辰五月初五日 鉄翁座元」と記しており、また『続長崎実録大成』では「十七代 祖門 文政二卯年ヨリ文政三辰年マデ 看坊老年 後鉄翁ト改」とあるから、着任の際に法号を「鉄翁」にしたと考えられる。そして同年の秋に描いた《水墨山水図》〔春徳寺蔵、図1〕（四十頁）には早くも鉄翁の款を使い始めている。ちなみに春徳寺境内にある鉄翁禪師碑の塔銘（一八八八、菊池純撰）には「禪師初喜鉄門鉄舟之画蘭、因号曰鉄翁（禪師初めて鉄門・鉄舟の蘭画を喜び、それゆえ号は鉄翁と曰く）」と、水墨画の名手として知られる南北朝時代の臨済宗の高僧・鉄舟徳濟（？—一三六六）を鉄翁が慕ってこの号にしたと記しているが、この説の出所は不明である。鉄翁の号は他に蓮舟、華岳主人などがあるが、作品の落款には「鉄翁」が圧倒的に多く用いられている。また「華岳鉄道人」（神戸市立博物館蔵《山水図》、一八二四）、「妙言」（長崎歴史文化博物館蔵《西山記》、一八二五）〔図2〕（四十一頁）なども見える。

嘉永三年（一八五〇）、鉄翁は三十年間務めた春徳寺住持を六十歳で退任し、同五年（一八五二）から春徳寺の末寺東淵山雲龍寺に隠居、画禅三昧の生活を送っていた。明治改元の際に春徳寺に戻り、明治

四年（一八七二）十二月十五日、病気で歿する。享年八十一歳である。

鉄翁は墨蘭と山水画の名手で知られ、その画名が全国に広まっていったのは、嘉永頃からだと鶴田武良が指摘している¹⁵⁾。当時、越後の長井雲坪、江戸の滝和亭など、鉄翁の門下には全国からの遊学者が多く集まっていた。渡辺庫輔の『鉄翁門人』に収録された二十六人はその一部に過ぎない。またその画を求める者が絶えなかったことは、鉄翁宛書簡によつて窺える¹⁶⁾。例えば、長崎歴史文化博物館には六曲一双の四君子屏風（文久二年、一八六二）があり、栗岡家が御用達を勤めた紀州徳川家の命により描いたと伝わっている¹⁷⁾。また『崎陽談叢』（荒瀬桑陽著）には「鉄翁好画」という逸話があり、「鉄翁平生吝嗇で画資を食うから、世人多くこれを賤しんだ。されど気にむいた書画があつたら、金銭を惜しまないでこれを貰つた（原文は漢文）」とある。潤筆料の多くは、書画収蔵に費やしたようである¹⁸⁾。そしてついに慶応三年（一八六七）、鉄翁は「拒相見」（春徳寺蔵）という文を雲龍寺門頭に掲げ、老衰を理由に面会と潤筆を謝絶した¹⁹⁾。その頃、すでに鉄翁の贖作は多く出回っていた。鉄翁門下にも贖作を作る者が現れ、「曾て聞く、禪師の門下に頗る贖作の妙を得たる者あり。遂に禪師の擯出する所となれり」という伝聞もあるほど²⁰⁾。作品が人気であった。『近世名家書画談』三編（安西雲煙編、一八五二年刊）では田能村竹田の提示した分派に従つて、「天保間山水を以て家に名ある者は京（浦上）春琴、（中林）竹洞、大阪（岡田）半江、

竹田、江戸（高久）^{あいがい}靄厓（菅井）梅関、長崎鉄翁（木下）逸雲也」と、鉄翁を天保年間の名家として挙げている。このように彼は長崎南画三筆（鉄翁・木下逸雲・三浦梧門）の一人として、在世中に既に名声が全国に広がっていた。藤岡作太郎も鉄翁を「実に竹田と相並んで、九州近時の大家なり」と、高く評価している。²¹ さらに『墨林今話』（蘇州映雪草廬重刻版、一八七二年）でも鉄翁の伝が収録され、「客有乞其画者、聞文人雅士則贈之、若富家豪族、雖持多金求之不易得也（客にその画を乞う者有り、文人雅士と聞き即ちこれを贈り、若しくは富家豪族、金多く持つと雖も、之を求めて得易からざるなり）」と記されている。これは『墨林今話』の初版に記載なく、来舶清人の蔣子賓が重版の際に増補した内容であり、明治初年、鉄翁の名は中国にまで伝えられていたことが分かる。

鉄翁の高名はその作品の価格にも反映されている。文久元年（一八六一）の『書画価格録』には三百名の書画家の価格が収録されており、鉄翁は六十五匁、上から十三番目の高値である。渡辺崋山（四十五匁）、与謝蕪村（三十五匁）、田能村竹田（三十匁）などよりも高く、当時の市場評価が現在と異なることが分かる。さらに明治十六年（一八八三）の『全国古今書画定位鏡』（東花堂宮田宇兵衛）においても、鉄翁は金八十匁で、古人書画部の約七十名の書画家の中で、上位二割に位置する価格である。その後、鉄翁の相場は徐々に下落し、大正年間帝国絵画協会が発行した『帝国絵画番附』（二九一九）

においては百五十匁となっており、「古人の部」の四〇六名の画家の中で、真ん中よりは上だが、上位三割にも入っていない。

相場の下落は、明治以降の南画の衰退を背景としているのである。池大雅・谷文晁・田能村竹田など、いわゆる第一流の大家は過去の通り評価されているが、その次にくる二、三流の南画家たちは次第に忘れられてしまう。しかし鉄翁は、一時的にせよ名が高かったことは看過できない。今日と異なる評価システムであった時代、高く評価されていた鉄翁は、実際にはどのような作品を描いていたのか、続いて、鉄翁の山水画を中心に、その画風の由来と変化について考察する。

二、鉄翁祖門の画業——山水画を中心に

(1) 鉄翁祖門の師承関係

荒木千洲の『続長崎画人伝』（一八五一年序）には鉄翁の師承関係について、「初学画於石崎融思、後亡幾、更師清人江稼圃、不失其師授、能画水墨山水花卉、今見行於世（初めて石崎融思に画を学び、後いくばくもなくして、更に清人江稼圃に師し、其師授を失わず、水墨山水花卉をよく画き、今見に世に行なう）」と述べられている。石崎融思（二七六八—一八四六）は小原慶山（？—一七三三）のルーツを引き継

いた唐絵目利であり、鉄翁は彼に絵の手ほどきを受けたようである。唐絵目利美術には濃彩の風俗、花鳥、道釈人物画など、すなわち北宗画風の作品が多いが、融思には稚拙な水墨山水画も残っていること⁽²⁴⁾から、鉄翁に南宗画風を教えた可能性もあるだろう。鉄翁の北宗画風の作品について、古賀十二郎によると、かつて木下家（木下逸雲の末裔）には鉄翁の粉本が残っており、中には極彩色の《関帝像図》があつたが、「何となく慶山風であり、融思の筆意が顕現している」と述べている。この粉本は、今は長崎大学図書館に保管されているが、署名がないため、作者の判定は難しい。一方、『崎陽三大家遺墨展観録』（二八九四年序）には、題目しか確認できないが、楊覚⁽²⁵⁾三・沈萍香⁽²⁶⁾賛の《着色関帝図》がある。他に《雲中釈尊図》もあり、おそらく渡辺庫輔が言及した弘化四年（一八四七）の探幽筆《雲中出山釈迦図》の模写であろう。現在確認できる伝世作品には、長崎南山手美術館所蔵の《菅公像》がある。

一方、鉄翁は、来船清人の江稼圃を師として南宗画を学んだ。田能村竹田は『竹田荘師友画録』の中で、鉄翁の画について、「其画山水仿江稼圃、重巒疊嶂、沈鬱蒼莽、嵐氣襲人、至梅竹雜卉殊有秀韻（其山水を画くは江稼圃に仿う。重巒疊嶂、沈鬱蒼莽、嵐氣人を襲う、梅竹雜卉に至つて殊に秀韻有り）」と述べている。また鉄翁は書家であり、画人でもある貫名菘翁（一七七八一—一八六三）について、「菘翁は書を能し、尚ほ画事に耽り、博く各家の画論画譜等を買すること

多きも、一旦我が門に入て稼圃翁の口訣及び我が得る所の者を聞きしより、書法の道理を以て直ちに之を了悟し、其酬対論述する所皆其理に適せり」と述べている。鉄翁には書の作品は少ないが、絵の描き方は書にも通じる、とする書画一致の考え方を持つてこう言ったのであろう。ここには、鉄翁が江稼圃の画訣を重んじていたことが示されている。

江稼圃（一七四六一—一八二六）の名は大来、字は泰交、蘇州の人である。その画は李良（雲海）に師事し、四王の末流に位置づけることができる。江稼圃は文化元年から文政頃にかけて度々来朝し、大田南畝、菅井梅閑、遊竜梅泉、齋藤秋圃など長崎内外の文人・画人と広く交友した。鉄翁の入門時期について、永見徳太郎は『長崎の美術史』の中で文政一年（一八一八）、二十八歳の時のこととしているが、この説の出所は不明である。一方、鉄翁・逸雲の弟子、川村雨谷によると、鉄翁・逸雲の江稼圃入門は逸雲が十八歳の時、すなわち文化十四年（一八一七）、鉄翁二十七歳の時のこととなっている。また、入門時の紹介者は唐通事・遊竜梅泉（通称彦次郎、諱は俊良、一七八六一—一八一九）であつたようである。

江稼圃の他に、細川潤次郎の『梧園画話』では「弘化初、陳逸舟来長崎、善山水、鉄翁又受其指授、而画益進、逸舟学画於王源、王源之画出於王翬、虞山派是也（弘化初、陳逸舟長崎に來り、山水を善くし、鉄翁は又其指授を受け、而して画はますます進む。逸舟は画を王源



図1 鉄翁《水墨山水図》
文政3年（1820）春徳寺蔵

に学び、王源の画は王翬より出す。これは虞山派なり」と、陳逸舟にも師事したと記されているが、前文の江稼圃に関する記述に誤りが多いため、信憑性が低いと考えられる。³³ 陳逸舟筆《晴風暖翠図》（個人蔵）には「鉄翁開士方家正之」の落款があるため、鉄翁と陳逸舟とは面識があることがわかつている。³⁴ しかし鉄翁が彼を師として仰いだ証拠が見当たらず、『鉄翁画談』の中で「先師」として言及されていたのも江稼圃一人しかない。

『竹田荘師友画録』の「熊勇」条には「山水倣董法、自言得之江稼圃、近日鎮人作画如鉄翁逸雲諸君往々皆然（山水は董法に倣い、自らこれを江稼圃に得ると言い、近日鎮人、画を作ることを鉄翁・逸雲の如し。諸君往々にして皆然り）」とあるように、当時、長崎では多くの人が江稼圃の画を学んでいたようである。その一門のことを、古賀十二

郎は江大来系としてまとめている。³⁴ 永見徳太郎がまとめた長崎の南宗文人画の系譜でも、石崎融思と江稼圃を初めとし、三筆の鉄翁・木下逸雲・三浦梧門を経て大きく展開している。³⁵ 江稼圃の影響の範囲については別論に譲りたいが、鉄翁の弟子・中村陸舟の『陸舟遺稿』（二八九二年刊）に「画有南北両体而已、北画古来鳴於世者多矣、而南画独清客江大来、昔年遊於崎、初伝画法我師鉄翁和尚木下逸雲両子、爾來學者無不因焉（画は南北両体有るのみ、北画は古来世に鳴る者が多く、而して南画は独り清客江大来（稼圃）、昔年（長崎）に遊び、初めて画法を我が師鉄翁和尚・木下逸雲両子に伝え、爾來學者因まざることなし）」（「記夢」）とあるように、南宗画を日本に伝えたのは江稼圃であるという考え方には、江稼圃を通じて南宗画の正脈を引いた鉄翁一門としての自負がうかがえる。実際に鉄翁は江稼圃からのような影響を受けていたのか、以下、館蔵作品と売立資料を中心に鉄翁の画風の変遷を整理しつつ、考察する。

(2) 鉄翁祖門の山水画

現存する鉄翁の山水画作例の中で、最も早い時期のものとしては、春徳寺蔵の《水墨山水図》〔図1〕がある。落款には「庚辰秋日鉄翁」とあり、文政三年（一八二〇）、住持に就任したばかりの頃の作品である。山肌に施す長い皴と丸い点苔は、江稼圃筆《倣黄公望山水図》³⁶と共通するところがあるが、未熟さは所々に露呈している。



(右) 図2
鉄翁《西山記》文政8年（1825）
長崎歴史文化博物館蔵

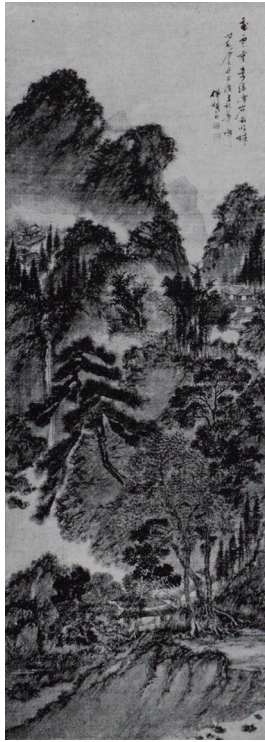


(左) 図3
鉄翁《浅絳山水図》文政10年（1827）
長崎歴史文化博物館蔵

例えば画面の二分の一を占める巨大な松の木は、呉門画派にも多く見られるモチーフだが、ここでは唐突に見える。山腰にある四阿、谷から流れ落ちる滝、乗舟する文人など、モチーフの配置方法も常套的であり、この作品には参考作があるのかもしれないが、作者は筆法や墨色の変化、および奥行き表現を把握し切れていないことが分かる。

文政年間の作品は、このように構成と表現が未熟な作品がほとんどであるが、『西山記』（文政八年、長崎歴史文化博物館蔵）〔図2〕や、『浅絳山水図』（文政十年、長崎歴史文化博物館蔵）〔図3〕などからは稚拙ではあるが、中国書画を忠実に学んでいることがうかがえる。『浅絳山水図』では王蒙の牛毛皴ぎゅうもうしゆんを使い、積み上げ式の山水を描いている。『水墨山水図』〔図1〕と同様の問題を残しつつ、江稼圃を経由して清初正統派の倣古山水の垂流を汲んでいると考えられる。しかし本作に見られるような、墨色の濃淡変化が少なく、疎放な湿筆と淡い墨色を好む傾向は、それ以降の作品にも一貫している。

『西山記』〔図2〕は浅絳せんこうの真景図で、酔月という人物が長崎の西山に築いた書屋を描く作品である。真ん中に据える山が画面の主体となり、書屋は右下の樹木に覆い隠されている。山石には淡い皴法が少し施されているが、立体感や量感には主にぼかしによって作り出されている。また山頂のみに密集する雑木は、点苔による表現を拡大するように見え、山の形を補完している。皴法の運用の不十分さ



(右) 図4
鉄翁《浅絳山水図》天保3年（1832）

(左) 図5
鉄翁《着色松林滝山水図》天保3年（1832）



と、形式化した雑木の描き方からは、中国画から学んだ画法を真景の描写に活かすには、課題がまだ残っていることが見て取れる。

前述のように、天保年間になると山水名家として鉄翁の名が挙げられるようになる（『近世名家書画談』三編）。天保時期の作品として、売立目録では天保三年（一八三二）の《浅絳山水図》〔図4〕と《着色松林滝山水図》〔図5〕がある。モチーフの配置や空間の表現はこれまでと一線を画し、かなり熟練してきているように見える。筆遣いや画面構成から勘案するに、二作とも舶載画を模写した可能性が大きい。他に無紀年の《米法山水図》⁵⁴も同類であり、この時期の作品であると考えられる。

弘化頃には折帯皴と披麻皴を使った作品が著しく増える。この時期の鉄翁は倪瓚・黄公望の画法に夢中だったようである。『鉄翁画談』では、鉄翁が弘化三年（一八四六）に上京の途中にも倪瓚画法で山水を描いたと記している。伝世の作例としては、長崎歴史文化博物館蔵の、弘化二年（一八四五）〔図6〕と嘉永三年（一八五〇）〔図7〕の《山水図》がある。また売立目録でも、「倣倪高士筆法 時癸卯秋日」と款のある、天保十四年（一八四三）の《水墨山水図》〔図8〕が確認できる。舶載画を模写した可能性もあるが、山体の量感を表す軽快な皴筆は、筆遣いの円熟化を示している。倪瓚の折帯皴を使用した江稼圃の作例には、元松洞庵小倉家蔵品の《山水図》〔図9〕がある。本作には年紀と作画場所が書かれておらず、中国で描



图9 江稼圃《山水图》



(右) 图6
鉄翁《山水图》
弘化2年(1845)
長崎歴史文化博物館蔵

(左) 图7
鉄翁《山水图》
嘉永3年(1850)
長崎歴史文化博物館蔵



图8 鉄翁《水墨山水图》
天保14年(1843)



(右) 图10
江稼圃《秋景山水图》
嘉慶23年(1818)
長崎歴史文化博物館蔵



(左) 图11
江稼圃《清谿重嶺图》
嘉慶15年(1810)
個人蔵



(右) 图12
鉄翁《秋景山水图》
安政5年(1858)
長崎歴史文化博物館蔵



(左) 图13
鉄翁《谿山無尽图》
万延元年(1860)

かれた可能性もあるが、江稼圃のこのような簡単構図の小品は、鉄翁の倪瓚・黄公望筆法への偏好に影響したかもしれない。

しかし鉄翁の作品には、江稼圃の代表的な画風、すなわち長崎歴史文化博物館蔵の、嘉慶二十三年（一八一八）《秋景山水図》〔図10〕のような清初正統派の積み上げ式山水は極めて少ない。模倣の時期を経て、鉄翁が独自の山水画風を確立したのは安政年間、すなわち雲龍寺に隠居し始めた時期である。この頃には数点の大作を残しており、《秋景山水図》（安政五年、一八五八、長崎歴史文化博物館蔵）

〔図12〕と《谿山無尽図》（万延元年、一八六〇）〔図13〕³⁸は代表的作品である。積み上げ式の巨幅山水といえ、江稼圃には前述《秋景山水図》のように王翬の画法を倣った作品のほか、自題によれば高克恭^{こくきょう}の画法に倣ったという《清谿重嶺図》（嘉慶十五年、一八一〇、個



図14 鉄翁《山水図》安政5年（1858）

人蔵）〔図11〕³⁹もある。

しかし鉄翁は、江稼圃画に見られる山の高さを強調する構図と正硬な筆法を取り入れず、前述天保三年（一八三二）の《浅絳山水図》〔図4〕（四十二頁）から相変わらず、主に広い水面によって平遠で清淡秀雅な風景を表現していた。《秋景山水図》〔図12〕では俯瞰的な視点をとり、主峰から前景の水岸までは「之」字形で、手前に巨大な岩と樹木を配置する。こうした構成によって、江稼圃の作品より広々とした空間を創り出しているが、ここに四王画風の影響が明らかである。後述のように、鉄翁の縮図冊にある婁東派画家・王宜^{おうぎ}の作品には似たような構図が見られる。筆遣いにおいて、鉄翁は淡墨で山石をまんべんなく塗りつぶして、披麻皴で立体感を出している。色面を塗る手法は、小青緑や浅絳の設色山水を想起させる。渴筆の使用はほぼ確認できず、かつ皴法が墨の色面に溶け込むことなく、線と面が互いに映え、秀麗な雰囲気醸し出している。樹木を描く時にも、鉄翁は先に淡墨で色面を塗るため、潤った空気感が画面に漂っている。同様のものとして、売立目録では同年の《山水図》〔図14〕も確認できる。

《谿山無尽図》〔図13〕の『長崎派写生・南宗名画選』での表題は《青緑山水図》であるけれども、作品の現所在は不明で、モノクロの図版しか確認できない。本作はより変化のある画面構成を試みており、婁東派の流れを引いたと思わせる。湿筆による滑らかで太い披



(上段右) 図15
鉄翁《秋景山水図》
文久2年(1862)
メトロポリタン美術館蔵

(上段中) 図16
鉄翁《山水図》
慶応3年(1867)
長崎歴史文化博物館蔵

(上段左) 図17
鉄翁《雪景山水図》
安政4年(1857)
長崎南山手美術館蔵



(下段右) 図18
鉄翁《冬山密雪図》
万延元年(1860)
熊本県立美術館蔵



(下段左) 図19
鉄翁《雪景山水図》
慶応元年(1865)
ミネアポリス美術館蔵

麻皴、山頂に集まる丸い点苔などは、江稼圃の倣沈周作品と共通している。江稼圃が長崎で描いた作品には沈周の画法を模倣したものが多いため、鉄翁に影響したのではないだろうか。前述安政五年（一八五八）の《秋景山水図》〔図12〕（四十四頁）と同様、倪瓚・黄公望画法の閑寂感を薄めて、清淡秀雅な画風を次第に確定していく道程がこの作品からも見受けられる。画面構成と用筆の熟達度から、《谿山无尽图》〔図13〕（四十四頁）は鉄翁の山水画学習の到達点とも言うべきであろう。

万延以降、鉄翁には大作がほとんど見られなくなり、倪瓚の「一水兩岸」に基づく常套的な構図が多くなるが、新安派の「玻璃山水」を想起させるような、透明な山水にまで発展している。文久二年（一八六二）の《秋景山水図》（メトロポリタン美術館蔵）〔図15〕や慶応三年（一八六七）の《山水図》（長崎歴史文化博物館蔵）〔図16〕が示すように、披麻皴はさらに淡くなり、点苔や雑木は輪郭線を強調するように施されている。山は平面的に見え、水と空の余白は白黒の対比となる。その合間に樹木や屋舎がアクセントをつけているが、画面全体は明快で清澄な雰囲気である。渴筆を使わず、丸みの帯びた筆遣いと楕円形の罨頭はんどうは、新安派より沈周に近いといえるが、作品全体の趣向が新安派に啓発された可能性は否定できない。

倪瓚・黄公望の筆法と「一水兩岸」構図を土台にし、沈周の画風の学習を経て、新安派の透明感を取り入れた鉄翁の画風は、明清画

の域を出るまでにはなっていない。しかしこのように淡泊で秀麗な山水には、中国画に対する鉄翁独自の好みと取捨選択、および日本南画における独自の趣致も見受けられる。

他方、鉄翁の雪景山水図も有名であり、作例は雲龍寺時代に集中する。例えば長崎南山手美術館蔵の《雪景山水図》（安政四年、一八五七）〔図17〕や熊本県立美術館蔵の《冬山密雪図》（万延元年、一八六〇）〔図18〕のように、鉄翁の雪景山水は、空と水は墨で一色、緩急のある写意的な墨線で山の輪郭を引き、僅かな皴法と点苔のほか、山の部分はほとんど余白で表す。ここでも、画面は白（山）と黒（空と水）で二分され、線（皴法）と点（点苔や葉）は面的な表現に統一されている。疎筆の雪景山水を、鉄翁は最晩年まで描き続けていた。長崎歴史文化博物館には明治四年（一八七二）の作品が所蔵されている。ミネアポリス美術館蔵の雪景山水の小品（慶応元年、一八六五）〔図19〕は、来舶清人・伊孚九いふきゅうの逸筆山水を思わせるような疎筆であり、日本的な文人画趣味を存分に表していると考えられる。

鉄翁の山水画に、江稼圃及び清四王画風からの影響は確認できるが、それ以外にも、舶載書画から多くを学習していたのは明らかであろう。鉄翁は、中国画の模倣を経て、雲龍寺時代、すなわち晩年には独自の画風を確立した。鉄翁の画は明清画学習の成果を消化して、清澄秀麗な表現にまで発展したが、全体的には限られた表現・構図にとどまっており、変化には乏しいのである。また『鉄翁画

『談』で鉄翁は江稼圃の画訣に度々言及しているが、その具体的な画法には触れていない。鉄翁の作品でも江稼圃の画風から離れる傾向が確認できる。そのために、鉄翁は師の様式を継承・広めるよりも、むしろ高尚な筆意・画意など、師または書籍に教わった南宗画の精神性により関心を持つていくのではないかと考えられる。実際に『雲煙逸話——扶桑南画正統』（蕪城秋雪、一八九七年刊）には「清客江稼圃の藩籬に在り、逸雲は其力を得たり、鉄翁は其韻致を得たる者也」とあるように、「韻致」を重んじる画風が確立されたのである。

江稼圃からの様式的な影響が少ないとすれば、鉄翁の学習した中国画の内実を分析するには、彼の観た舶載中国画の内容を明らかにする必要があるであろう。『十洲詩鈔』（細川潤次郎、一八九〇年序）巻十九の論画絶句三十首には「勿怪画成尤老蒼、平生用力越尋常、每觀名跡皆摸写、粉本多於一万張、鉄翁自言如此（画成りて尤も老蒼たるを怪しむ勿れ、平生力を用うること尋常を越ゆ、名跡を觀る毎に皆摸写し、粉本一万張より多し。鉄翁自ら言うこと此の如し）」とあるが、いまのところ、鉄翁の粉本は未見である。したがって天保から嘉永ごろ、鉄翁が中国画を多く模写していた時期に、具体的にどのような粉本を作っていたかについては不明である。しかし雲龍寺時代に鉄翁が作成した縮図資料は伝わっているので、彼の観た書画の内容を把握することはできる。以下、長崎歴史文化博物館蔵の縮図を通じて、その内容から、鉄翁の中国画学習について考察する。縮図を分

析することで、鉄翁の画風の成立背景を立体的に捉えるのがねらいである。

三、鉄翁筆縮図冊の基本情報

(1) 書誌情報と伝来経緯

長崎歴史文化博物館渡辺文庫蔵の鉄翁縮図は全部で四冊あり「図20」、書誌情報を表1にまとめる。

二冊の『古今書画縮図』（以下『古今縮図』①②）を納める桐箱の表には「太素軒主人古今書画縮図二巻」の箱書きがあり、裏には明治二十年（一八八七）付撰風轍（倉野煌園）跋と明治二十三年（一八九〇）付梅屋源豊跋がある。『縮図拔萃』（以下『縮図拔萃』①）と『画論拔萃山水花卉縮図』（以下『縮図拔萃』②）の箱には「倉野煌園旧蔵／鉄翁禪師遺墨縮図拔萃帖／式冊」の表書きがあり、裏書は「昭和八年癸酉十二月末添函／翠静荘書画部／装置」である。二冊ずつ桐箱に納められて伝来しているが、元来は一括であると考えられる。

鉄翁門人・倉野煌園（一八二七—一八九六）は師の言行を記録した『鉄翁画談』において、縮図冊落手の経緯を記している。

其病床に在るの日、自ら起つ可からざるを知て、其常に愛玩

する所の小硯及び春徳寺開山伝来の古墨〔其袋に禪師の自題あり〕禪師自ら臨写する所の書画縮図帖及び裕文堂自製銀頭の要筆浄純宿羊毫の四品を以て余に贈らる。時に壬申十月、法弟祖禎師之を予が家に齎し来る。

壬申は明治五年（一八七二）、鉄翁が残した縮図の総冊数は不明である。『古今縮図』の箱の裏書にある明治二十年焯園の跋によると、焯園はこの二冊を梅溪という人に売ったようである。手放した理由は不明であるが、焯園は明治十八年（一八八五）、東京鴻盟社から『鉄翁画談』を自費出版している。翌年、色刷りの『鉄翁画譜』も同

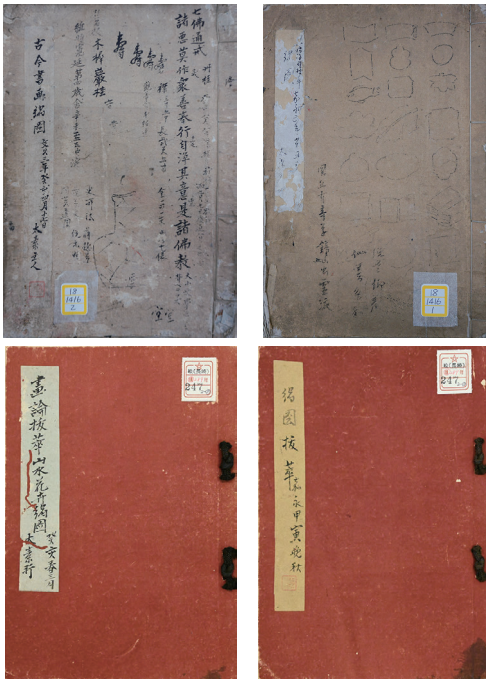


図20（上右・左）『古今縮図』①②、（下右・左）『縮図拔萃』①②それぞれの表紙 長崎歴史文化博物館蔵

表1 鉄翁縮図冊の書誌情報

冊番	資料名	資料番号	題箋	題箋紀年	法量 (cm)	綴じ方	表紙色	丁数
A	古今書画縮図 (古今縮図①)	18 1416 1	…伝詩句拔萃 縮圖 嘉永六年癸丑… 太素…	1853	26.6×18	四つ目綴じ	白茶	37
B	古今書画縮図 (古今縮図②)	18 1416 2	古今書画縮圖 文久三年癸亥四月十七日 太素主人	1863	26.6×18	四つ目綴じ	白茶	47
C	縮図拔萃 (縮図拔萃①)	絵(長崎) 239-1	縮圖拔萃 嘉永甲寅晩秋／古今書畫縮圖 太素軒 甲寅丁卯之間拔萃／古今書画縮圖諸拔萃 文久三年癸亥慶應乙丑添紙／書画縮圖…	1854、 1854-55、 1863-65	22.3×15.5	四つ目綴じ	赤	59
D	画論拔萃山水花卉縮図 (縮図拔萃②)	絵(長崎) 239-2	畫論拔萃山水花卉縮圖 癸亥春三月 太素軒	1863	22.3×15.5	四つ目綴じ	赤	47

(筆者作成)

社から出版し、画譜の印刷には莫大な私財を投じたようであった。⁴²⁾

渡辺庫輔は『祖門鉄翁』（未刊手稿、長崎歴史文化博物館蔵）において、『縮図拔萃』①・②は吉善子という人の所有であると記している。

曾て予これを所望してやまざるとき、吉善子の曰く、これは煌園の旧蔵なり、煌園より某氏に渡り、某氏はこれらを春徳寺に寄贈するを約し、而も誤りて吉善子に郵致したり、此に於て春徳寺の雲巖熟慮し、寺に在る時は又いつの日か佚散して紙屑となるべし、吉善子なれば大切に保存すべしとて割愛せらん、遂に所有する所となれり、左様の因縁あれば、譲渡すことなり難しと答へたりき。猶ほもと一冊なりして、これを二冊に仕立て題簽の落ちたるをそれに付け置きぬと語りたりき……

『縮図拔萃』①と②は元々一冊で、所蔵者が改めて二冊に仕立てたようであり、その時に現在の赤色表紙をつけたのだろう。また再装幀の時周囲を裁ち落としたため、この二冊は『古今書画縮図』より寸法が一回り小さい。

内容と照らして合わせると、題箋にある年紀は冊子を使い始めた時間であることが分かる。四冊の縮図はいずれも雲龍寺隱居時代に作られたもので、『古今縮図』①と『縮図拔萃』①の一部、『古今縮図』②と『縮図拔萃』②はほぼ同じ時期に書き始められていた。『縮

図拔萃』①の五十五丁にある題箋は文久三年（一八六三）と慶応元年（一八六五）のものだが、その後ろにはわずか四丁しかなく、五十九丁にも破損が激しくて年代不明の題箋がある。合装前の縮図冊の状態は不明である。落丁があったのか、それとも合装した際に頁を並び替えたのか。渡辺庫輔は『祖門鉄翁』の中で、慶応丙寅年（一八六六）付の題箋があると記しているが、現存の縮図冊には見当たらない。

この四冊の資料を、本論では便宜上一括して「縮図冊」と呼んでいるが、その内容は、縮図だけではなく、書籍の摘録や、備忘録的な書付もある。画や文字は時に整然と、時に気まぐれに書き込まれている。人に見せることを意識していない私的な記録としての特徴が明瞭であるが、冊によつて、内容に偏重がある。『古今縮図』の二冊は書画作品の記録を中心に、『縮図拔萃』の二冊は漢詩や画論など、文字内容を中心に行っている。おそらく鉄翁は手元に常に二冊を用意して、使い分けていたのであろう。さらに、縮図の画題を大ざっぱに花鳥類と山水類に二分すると、『古今縮図』①には花鳥と山水の縮図がほぼ同じ数量であるが、『古今縮図』②には山水縮図が明らかに増えており、作品全体の構図と画賛をきちんと模写したものも多い。四冊の内容を整理・分析することで、鉄翁がどんな書画を観ていたか、そして作品のどの部分に注目していたかをうかがうことができると考えられる。それを考察する前に、次節ではまず書籍からの摘録の内容を紹介

介したい。

(2) 摘録の内容

摘録は主に『縮図拔萃』①と②に集中しているが、二冊の『古今縮図』にも散見される。ほとんどは書画と関連する内容で、舶来品・レシビなど、日常的な出来事に関する書付もある。ここでは詩句、画人伝、画論など、書画と関連する内容のみを取り上げる。

① 詩句

書付の大半を占めているのは漢詩である。詩題は主に四君子や花卉などで、同じ主題の詩をまとめて数篇抄録する箇所が多いため、書物からの抄出であると推測できる。詩の収録元を調べてみると、鉄翁は主に『佩文齋詠物詩選』(汪霏等奉勅撰、一七〇五年成)や『佩文齋広群芳譜』(汪灝等奉勅撰、一七〇八年成)を読んでいたことが推測される。いくつかの山水詩は、『歴代題画詩類』(陳邦彦奉勅撰、一七〇七年成)からの記録の可能性がある。詩句を摘録するのは、もちろん画賛に使うためであった。鉄翁には、作詩ができたということが分かる記録が見当たらないため、題詩は他所から抄録した可能性が高い。漢詩の教養の乏しい画家にとって、これは有効な学習方法であろう。また『鉄翁画談』には以下の内容がある。

鉄翁既に詩文書画を具備すと雖ども、尚ほ題詞に至て、多く古句を摘録し、或は画題のみを書して、曾て自作の詩を録すること少し。我れ深く之を愛賞す。漢土の大家古人此例少しとせず。子等、文学に乏しと雖ども、能く此理を領解して、古句を摘録し、其意を写して、自画の布置を補はば可なり。何ぞ文学なきを病まんや。

このように、鉄翁は門人にも詩を摘録することを推奨していた。詩意の理解は、画の構想にもつながるため、画賛用に詩を摘録することは文学性がないことではないと説いている。

② 画人伝

『古今縮図』①には、黄慎・王時敏・王鑑・王翬・王原祁・邱園・姚若翼・姚節の伝が抄録されている。末尾に「書画小伝」と記されているため、『清書画名人小伝』(相馬九方編、一八四八年刊)がもとであることが分かる。¹³⁾『清書画名人小伝』は馮金伯纂輯『国朝画識』(二七九四年成)などを和訳したものである。『鉄翁画談』には鉄翁が黄慎の作品を観たことがあると書かれてあるが、他の画人の作品を実見したかどうかは不明である。¹⁴⁾これらの名人伝を抄出していることから、清初正統派への関心が窺える。

『縮図拔萃』①の十五、十六丁には方從義・高克恭・王宸・王紱・

王蒙・呉鎮・朱奩・王三錫などの伝が抜粋して記されている。婁東派の王宸・王三錫以外は、いずれも元明の大家である。王三錫の伝の注記によると、これらの内容は『歴代画史彙伝』（彭濶燦編、一八二五年成）からの抄録であることが分かる。本書の購入について、年代不明の五月二十三日付木下逸雲宛鉄翁書簡では、「昨日漸、画史彙伝手に入申候、代金六十六匁七分六厘ナリ」とある。王宸（号は蓬心）の伝の隣に、「王蓬心写於沉香楼」という、ある作品の落款が臨写されている。鉄翁は所持作品の作者についても調べていたことが分かる。この王宸の款を持つ作品は、『古今縮図』②の四十一丁に縮写されている。

③ 画論

縮図冊に引かれている画論は、『佩文齋書画譜』（孫岳頌等奉救撰、一七〇九年成）からの摘録が多いと考えられている。例えば『縮図拔萃』①の十四丁にある「山水之妙、多専於才逸隱遁之流、名卿高蹈之士（山水の妙は、多く才逸隱遁の流、名卿高蹈の士に専らにせられ）」（宋・張懷）も、「画謂之無声詩、乃賢哲寄興……（画はこれを無声詩と謂い、乃ち賢哲が興を寄る……）」（宋・趙孟頫）も、どちらも『佩文齋書画譜』第十五巻に収録されており、出所を確定することができると。画論の下には、鉄翁が「余思之久矣、然未有所得、可慚……（余はこれを久しく思い、然るに未だ得る所有らざるなり、慚るべく……）」

など、自らの感想も書き添えている。また同冊の四丁には宋・韓拙の画論「蓋前人以画為銷日養神之術、今人以画為図利劳心之苦……（蓋し前人は画を以て日を銷し神を養う術と為し、今人は画を以て利を図り心を劳う苦と為す……）」があり、これも『佩文齋書画譜』第十五巻の所収である。画論の横には「余以為格言故題（余以て格言と為す。故に題す）」という小さい字があり、この感想を含めた自賛は、メトロポリタン美術館蔵の《秋景山水図》「図15」（四十六頁）、および『長崎派写生・南宗名画選』所収《山水図》（明治四年、一八七二）に確認できる。すなわち、画論の抄出はその内容を学習するだけではなく、題面詩の摘録と同じように、画賛作成のための備忘録でもあったであろう。

漢籍の他に、釈白華輯・木下逸雲校『佩文齋画説輯要』（一八五八年自序、一八六九年刊）という『佩文齋書画譜』を摘録・訓読した本もある。木下逸雲の序（一八六五）によると、逸雲は門人の指導に『佩文齋画説輯要』を使っていた。当時の長崎遊学者たちも、画論の学習にあたって『佩文齋書画譜』またはその摘録本を多く使っていたことが分かっている。

また鉄翁は董其昌の画論もしばしば摘録していた。同じく『縮図拔萃』①十四丁には「作雲林画須用側筆、偏鋒也、非臥筆也……（雲林画を作るには須らく側筆を用いるべし。偏鋒なり、臥筆に非ざる……）」と、董其昌の「画訣」が抄出されている。倪瓚の画法には側

筆を用いるべきことについて、『鉄翁画談』に記されている逸話にも言及している。

禅師、曾て予に語て曰く、我れ京師に遊ぶ途次、讚州の旅館に於て倪法山水を作る、画家某其石法を画くを見て難じて曰く、曾て聞く、画は必ず懸腕直筆を要すと、然るに今師は横筆を用ゆ、抑も亦た其法ありやと。我れ之に示して曰く、倪氏の石法、折帶皴を画く時は横筆を正となすと。某憮然として曰く、曾て聞く、師は舶客江大来に従て画訣を得て画理に通ずと、其言果して誣ざるなり、今翁の言を聞て大に悟る所ありと。我れ竊に顧ふに、此人一二の画譜を讀て唯其一義を知り、未だ曾て画理を了せざるなり。夫れ真に画理を了して筆妙に至ることは、猶ほ仏理の教外別伝に在るが如く、唯其画譜を讀て文字の義理をのみ解するときは、決して画理を了悟すること能はず。

ここでは董其昌の画論には触れずに、江稼圃の教えを仄めかして「教外別伝」として語っている。また倉野篁園は同書において、「抑も禅師の画訣たる、皆是れ江大来より来るものなりと雖も、又禅師の了悟に出る所頗る多し」と述べている。しかし、門人を相手にした自慢話の要素もあると考えられ、実際に書籍から得た画論や画法を、鉄翁が自分の理論として門人に伝授していたかどうかは不明で

ある。

以上のように、縮図冊にある摘録の部分を見ると、鉄翁がどのように書画の知識を得ていたかが分かる。中でも『佩文齋詠物詩選』『佩文齋書画譜』など清代類書の利用は顕著である。摘録が、学習のためだけではなく、画賛を作成するための資料収集作業でもあったことは注目に値する。文人としての素養が不足していても、文人絵画のノウハウを蓄積することができたのである。

四、鉄翁筆縮図の内容と目的

縮図とは文字通り、本画を縮小して模写することである。原寸大かつ精密な「模写」より、小さくて簡単にしたもののが縮図であると考えられる⁽⁴⁷⁾。縮図の利点は、「仕事の早い点、分類保存乃至展覧に便なる点など」がある⁽⁴⁸⁾と挙げられている。多くの縮図は冊子に描かれており、携帯・閲覧しやすい特徴をもっている。

本画の寸法に制約されない縮図を描く目的には、書画の学習・参考、または鑑識、展観の記録、収蔵品の整理などがある。小さな略図とはいえ、後日再び見ると、本画を観た時の記憶を喚起することができる。そのために、大抵は本画の全体を写し、さらに題・款の内容、印章の位置まで記録するものもある。

しかし鉄翁の縮図冊において、「縮図」といえる絵の記録は、全体

の一部に過ぎない。本画の一部、ひいては画賛しか写さない簡単なメモもたくさんある。このような記録は、厳密には縮図とは言えない。しかし、実在する作品とリンクしていること、かつそこから鉄翁が観た作品の情報が抽出できるという意味で、本論では一括して「縮図」として取り上げる。狩野探幽や谷文晁の縮図も示すように、縮図を大量に蓄積できるということは、画家にとっては特権とも言える。すなわち大量の書画を手に入れ、またはつぶさに観る機会を得られる境遇にあることを意味するからである。それは画家の地位、周辺の人とのネットワーク、および書画の収蔵・流通状況とも関わってくる。そうして鉄翁は、まさに長崎の地の利を得ながら、人的ネットワークの中心をも占めた人物である。

粉本や縮図などを門外不出にする画派の情報占有とは異なり、長崎は書画を共有する開放的な空間であった。鉄翁が観た書画は、その周辺の長崎文化人や来舶清人、および鉄翁に入門した遊学者たちにも開放されていた。この点から考えると、長崎における書画活動の豊かさは、鉄翁の縮図冊にも投影しているのであろう。また鉄翁がどのようにこれらの作品を目にしていたかということも、縮図冊から読み取ることができる。以下、まず縮図冊から抽出した作者・作品の情報を整理し、続いて、鉄翁が縮図冊に書き込む目的を分析する。

(1) 縮図冊に記録されている作品

縮図冊において、作者名または落款が明確な記録は合計三四四点あり、二四三人の作者が確認できる(表2参照)。以下、作者を日本人、来舶中国人、およびそれ以外の中国人(舶来書画の作者)に分類し、作品と作者のそれぞれの構成の割合を示した。

日本人の枠には田能村竹田、小曾根乾堂、跡見花蹊などがいる。鉄翁周辺の人間が多いと思う。来舶中国人は、木庵、伊孚九、費晴湖、江稼圃、陳逸舟、楊覓三、沈萍香、華昆田、顔亮生、徐雨亭、王克三^{こくさん}など、計二三人である。伊孚九と費晴湖以外は、大半は鉄翁と同時期に活躍し、彼と直接的な交流があったと考えられる人々である。中でも江稼圃と徐雨亭の作品が特に多く記録されている。

姓名や伝不詳の人を含め、舶来書画の作者は二〇〇人以上もあり、圧倒的多数を占めている。中には倪瓚、沈周、文徵明、董其昌など名家もみえるが、ほとんどは二、三流の書画家である。時代別で見ると、清代の書画家が大半を占め、特に十七、十八世紀が多い。画風の系統・地域で見ると、浙派、呉派、松江派、新安派、揚州派、虞山派、婁東派、など諸地方流派が見え、明末以降江南地域の南宗画がほぼ包括されている。

縮図冊に見る作者の時代傾向が、舶来書画の輸入状況を反映していると考えられる。田能村竹田の門人・高橋草坪(一八〇四―一八三

表2 縮図冊記録作品・作者の構成割合

分類	作品／点	作品割合／%	作者／人	作者割合／%
日本人	10	2.9	6	2.5
来舶中国人	72	20.9	23	9.5
舶来書画の作者 (不詳を含む)	262	76.2	214	88
合計	344	100	243	100

(筆者作成)

表3 時代別縮図冊記録作品

	鉄翁縮図冊	『撫古画式』	『雲煙供養展観録』	『漱芳閣書画記』
成立	1853-67頃	1822-35頃	1833	1865
所収作者／人	清：140 明：45 元：3 未詳：49	清：34 明：64 元：7 宋：2 南唐：1 唐：1 未詳：27	清：19 明：32 元：3 宋：6 未詳：18	清：125 明：78 元：4 未詳：28
合計／人	237	136	78	235

(筆者作成)

五)は『撫古画式』(一八三二—一八三五頃成立、大東急記念文庫蔵自筆稿本)において、出身地の豊後国内、または上方で実見した中国画や粉本から人物や屋舎の図を引用し、画譜を構成した⁵⁰⁾。草坪は引用した図に作者名を注し、合計一三六名の中国画家が登場する。また『雲煙供養展観録』は天保四年(一八三三)八月二十日、室町時代の画僧・明兆の四百年遠忌のため、京都東福寺で行われた展観会の目録であり、古書画の部にはおよそ一三〇点が出品され、京都での収蔵状況が反映されている⁵¹⁾。これらの書物に記録されている書画作者を時代別に分類すると、それぞれの時代的な傾向を知ることができ。表3のように、一八三〇年代頃はまだ明画の方が多いが、一八五〇年代以降、清画が多数を占めるようになったことが分かる。

実際には、明画とされるものに清時代の贋作が多く含まれていることもよくあるのだが、全体的に見ると、十九世紀半ば頃に清画の流通数量が次第に明画を超えたことが確認できる。前述『清書画名人小伝』(二八四八年刊)の巻末にある著者・相馬九方の「小引」には「清人之跡流传於我、近日頗多(清人の跡の我に流传するもの、近日頗る多し)」とある。また浅野梅堂は『漱芳閣書画銘心録』の凡例(二八五六年成)においても、「書画好尚、歳改月変。今姑挙一端言之、五十年前專尚文祝沈唐、不重宋元之跡、是宋元之跡、所以湮沒不多伝也、後文祝沈唐真跡、漸又漸滅、于是明末清初諸名跡始重于世(書画の好尚、歳ごとに改まり月ごとに変わる。今姑く一端を挙げて之を言

うに、五十年前専ら文（徵明）・祝（允明）・沈（周）・唐（寅）を尚び、宋元の跡を重んぜず。これ宋元の跡が湮没して多く伝わらざる所以なり、後文・祝・沈・唐の真跡漸くまた漸減し、ここにおいて明末清初名跡始めて世に重んぜらる。」と述べている。浅野梅堂が『漱芳閣書画銘心録』を書いた十九世紀半ば頃、明末清初の書画が流行つており、その前は明時代中期の書画家が好まれていたことが分かる。世間にも書画の好みのこの変化は、舶載書画の内容に大きく影響されているのであろう。実際に『漱芳閣書画記』に記録されている清画の数は明画より著しく多いのである（表3参照）。

中国書画の輸入には、ある程度時差が生じており、日本の画人たちが求めていた最新の明清画は、いつも少し前の時期の作品となる。幕末になると、明末以降の作品が伝来するようになり、董其昌以降の南宗画も多く含まれていた。「南宗の画殊に正派に属す……子も宜しく南画を学ぶべし」（『鉄翁画談』）という江稼圃の教えに従って、鉄翁は南宗画を全般的に学習することができていたことは、縮図冊を通じてうかがえる。前代の南画家に見る画譜への依存、及び南北折衷の画風とは異なり、中国の南宗画風に忠実な鉄翁の画は、このような環境だからこそ生まれたと考えられる。

さらに、鉄翁の縮図冊には、同時代の書画や題も記録されている。『古今縮図』②の裏表紙には「書画冊頁 咸豊己未歲 楊秋平書」の書付がある。「書画冊頁」の詳細は不明だが、落款は咸豊九年（一八五

九）のものであり、鉄翁の縮図冊とは同時代の作品であることが分かる。また『縮図拔萃』②二十三丁には上海の画家・金爾珍（一八四〇—一九一七）の書と落款が記されており、「丁卯春金爾珍書並識」からは同治六年（一八六七）の書であることが確認できる。したがって、幕末の長崎では同時代の中国書画が流通していたことが分かる。これらの同時代作品には、商人が輸入した商品のほか、鉄翁が中国文人との交友・文通で直接入手したものも含まれていると考えられる。

さらに『古今縮図』②には王寅（字は冶梅、南京の人）の縮図と落款が二点記録されている。二十六丁には倣呉鎮法山水の縮図があり、落款には「上元冶梅王寅」と鉄翁の印がある。二十七丁にも「撫沈石田法 冶梅王寅」の落款があり、沈周画法の山水で、詩の内容からみると横にある縮図はその作品であろう。この二点の作品の制作時期は不明だが、王寅の渡日時期の分かる記録はいずれも明治十年代以降のものであり、その時鉄翁はすでに存命しない。すなわち鉄翁が目にしたのは王の来航前に日本に伝わった作品であろう。古賀十二郎によると、王寅は太平天国の乱から逃げて上海に至り、画で生計を立てる。その頃「上海に渡れる日本人などは、王氏の画を見て、之を奇とし、先を争うて、王氏の画を購ひ索めた。是に於て、王氏の名声は、一時に震ひ、長崎に於ては、有志の人々が、王氏に來遊を請ふ事になった²⁵」。先に作品が長崎で歓迎されたことが、王寅の

表4 全体が縮写された作品 *は来舶清人

位置 (冊番/丁数)	作者	内容	
A	6	倪瓚 弁峰秋霽図軸	
	19	江稼圃* 沈周法山水軸	
	28	陳逸舟* 沈周法山水軸	
	31	奚岡 書画帖	
B	1	黄琛 山水画帖か	
	3	陳元揆 山水画帖	
	3	李流芳 山水画帖	
	3	顧大申 山水画帖	
	3	徐雨亭* 山水画帖	
	4	沈宗敬 元人筆意山水軸	
	10、11	奚岡 山水画帖	
	13	陸灝 山水軸	
	13	韓曠 山水軸	
	14	陸坦 山水軸	
	15	石頤 山水軸	
	17	朱治憫 倣趙孟頫山水軸	
	18	秦涵 山水	
	18	項聖謨 山水軸	
	19	曹廷棟 山水軸	
	19	祁豸佳 董源法山水軸	
	19	成大口 山水軸	
	20	張洽 山水軸	
	20	董孝初 山水軸	
	21	符六 黄公望法山水軸	
	21	王昱 黄公望法山水軸	
	22	奚岡 董其昌法山水軸	
	22	李杭之 山水	
	23	曹垂星 山水	
	26	王寅 呉鎮法山水軸	
	26	孔毓雲 沈周意山水軸	
	27	王寅 沈周法山水軸	
	27	履泰 倪瓚法山水	
	31、32	呉歴 撫古十二幀(一部)	
	34	戴天瑞 山水	
	38	伊孚九* 秋江待渡図軸	
	39	祁豸佳 書画冊	
	41	王宜 山水軸	
	41	王宸 山水軸	
	42	江稼圃* 山水軸	
	C	9	普澤 山水軸
		20	徐雨亭* 米芾法山水軸
	D	21	許尚遠 山水軸
23		羅牧 山水軸	
45、46		徐雨亭* 山水画帖	

(筆者作成)

渡日のきつかけとなつたようである。このように、幕末の長崎と上海画壇との密接な交流の様子が、鉄翁の縮図冊からもうかがうことができる。

(2) 縮図冊にみる書画学習

前述のように、縮図冊は私的な記録としての性格が強く、他人に見せることを意識しない気まぐれな書き込みが多い。職業画家のように、制作の参考のための資料として蓄積しようとする意識があつたことも確認できない。落款と画面両方を写した完全な縮図もあるが、落款、または画面の一部のみを写した断片的な書付が多いので

ある。その目的は絵の練習、または備忘であるが、はつきり区別することができないものも多い。おそらく鉄翁は、冊子を持ち歩いていた。鑑賞した作品の気になる部分を随時書き留めていた様子が、縮図冊の内容の並び方から想像できる。

記録された内容の範囲によつて、鉄翁がどのような関心を持ち、作品のどの部分を観ていたかを推察することができる。特に全体が写された作品は、学習に値する対象として重視していたのではないだろうか。そうした山水画の縮図は主に『古今縮図』②に集中している。縮図の作者と内容を表4にまとめてみた。

鉄翁は、江稼圃のほか、陳逸舟を通じても沈周の画法を学んでい



(右) 図21
鉄翁《張洽筆山水図縮
図》『古今縮図』②二十
丁
長崎歴史文化博物館蔵



(左) 図22
鉄翁《王宜筆山水図縮
図》『古今縮図』②四十
一丁
長崎歴史文化博物館蔵

たようだ。徐雨亭の画帖なども数点縮写されている。舶載書画と同じように、こうした来舶清人の書画からも学んでいたようである。

舶載書画に関しては、縮写された作品の作者を地域別で見ると、顧大申、沈宗敬、陸灝、韓曠、陸坦、董孝初、普澤など、董其昌の系譜を引く明の松江地域の画家が多いことが分かる。また張洽・王昱・王宜・王宸など、江稼圃が属する婁東派画家の名前も見え、四王派への関心が窺える。特に張洽・王宜筆《山水図》の縮図は題も含めて、丁寧に縮写されている「図21・22」。王宜の作品の構図は、前述の《谿山無尽図》「図13」（四十四頁）と共通しているが、縮図の作成は文久三年（一八六三）以降と考えられ、《谿山無尽図》よりは遅いはずである。王宜のこの作品は鉄翁の所蔵品であった可能性もある。このように、鉄翁が婁東派の作品から構図を学習・借用していたことが縮図を通じて認められる。沈宗敬の原作は、個人コレクションに確認することができ、比較してみると鉄翁の模写「図23」は、画面の構図に重点を置いており、原作の筆遣いにはほとんど従っていないことが分かる。このように、縮図冊からは鉄翁が四王派を熱心に学習していた姿勢がうかがえる。

他に、新安派に属する李流芳、李杭之の名前も見える。前述のように、鉄翁の作品には新安派に通じる趣向があることから、個人的に好む画風だったのではないだろうか。

また鉄翁は清時代の画家奚岡・祁豸佳・呉歴の画帖を入念に縮写



图24 祁豸佳《書畫冊》第1圖 順治10年（1653）個人藏

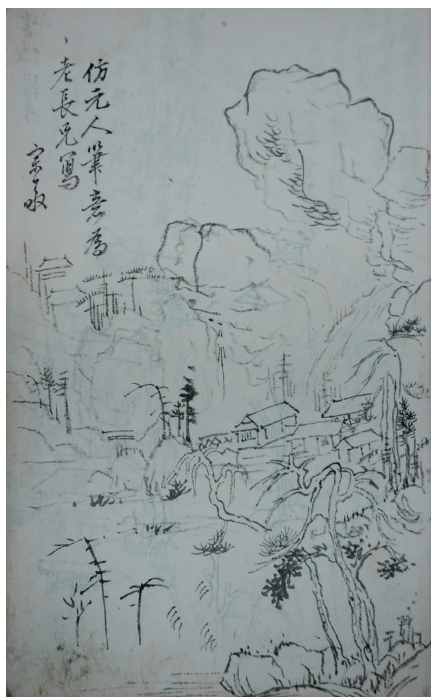


图23 鉄翁《沈宗敬筆做元人筆意山水圖縮圖》
『古今縮圖』②四丁
長崎歴史文化博物館蔵



图26 鉄翁《奚岡筆山水畫帖縮圖》
『古今縮圖』②十丁
長崎歴史文化博物館蔵



图25 鉄翁《祁豸佳筆書畫冊縮圖（做王蒙筆意）》
『古今縮圖』②三十九丁
長崎歴史文化博物館蔵



図29 江稼圃《天平幽境図》
嘉慶14年（1809）
長崎歴史文化博物館蔵



図28 鉄翁《江稼圃筆天平幽境図縮図》
『古今縮図』①三十丁
長崎歴史文化博物館蔵

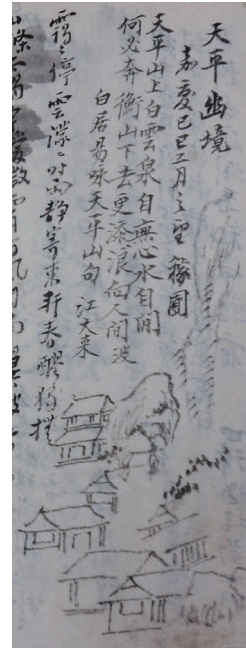


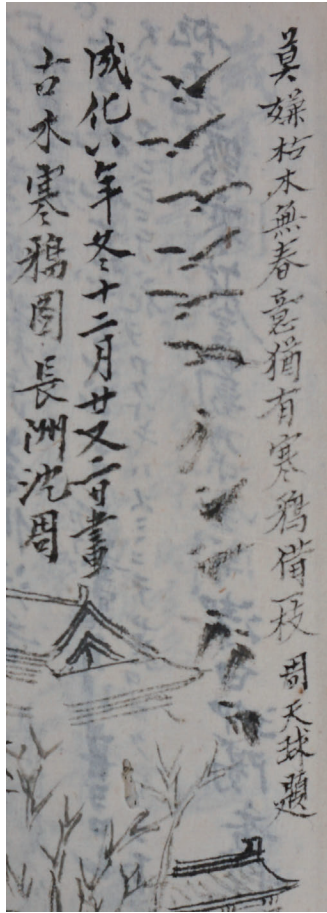
図27 鉄翁《江稼圃筆天平幽境図縮図》
『縮図拔萃』①四十丁
長崎歴史文化博物館蔵

していた。小さい画帖は比較的模写しやすく、また小景を好む傾向は、取り上げられた作品からもうかがえる。祁彥佳（一五九四―？）の書画冊（二六五三年）〔図24〕⁵⁵⁾（前頁）には全六面があり、それらは、王蒙・米芾・倪瓚・巨然・黄公望・馬和之の倣古山水である。鉄翁は、そのうち王蒙・米芾・倪瓚の三面のみ写している〔図25〕（前頁）。奚岡（一七四六―一八〇三）の山水画帖にも六面があり、鉄翁は四面を写している。建築、樹木、ロバの部分を取り取って、繰り返し描いていることから、個別のモチーフの描き方に関心があったことが見受けられる〔図26〕（前頁）。このようなモチーフの部分的な模写は、縮図冊には多く見かけられる。鉄翁はしばしば、作品の全体より、樹木、建築、山石、花卉果物など一部のモチーフのみに注目し、模写していた。

『縮図拔萃』①四十丁には「嘉慶己巳二月之望稼圃」款の《天平幽境図》（嘉慶十四年、一八〇九）が一部臨写されている〔図27〕。長崎歴史文化博物館蔵の原本〔図29〕と比較すると、鉄翁は近景と中景の屋舎、石壁の一部のみを写している。また落款も、文字情報の抄録だけでなく、原本の書体を忠実に



(右) 図30
鉄翁《沈周筆古木寒鴉圖縮図》
『縮図抜萃』②二十六丁
長崎歴史文化博物館蔵



(左) 図31
沈周《古木寒鴉圖》成化8年(1472)

模写している。また、『古今縮図』①三十丁にも《平幽境図》の屋舎が写されている「図28」。この作品はおそらく鉄翁の所有で、繰り返し模写されていたようである。

『縮図抜萃』②二十六丁には沈周筆《古木寒鴉図》(成化八年、一四七二)の部分的な縮写がある「図30」。原本「図31」と比較すると、鉄翁は沈周の落款と周天球の題を写し、また原作にある鴉の様々な描き方を一列に並べて写している。寒鴉の描き方の応用は、東京藝術大学美術館蔵の《古木寒鴉図》(一八六八)に認められる。

縮図冊では絵を模写せず、落款や画賛のみを写している場合も多い。臨写の対象としては、舶載書画と来舶清人の書画を区別せず、例えば『縮図抜萃』②二十二丁には来舶清人・王克三の画賛があり、筆の遣い方を説く内容である。鉄翁は作者の書体も模写しているので、書の学習、または賛文の内容、すなわち詩や画論などを記録・学習するなどの目的があったのであろう。この時期、鉄翁は古画模倣を経て、独自の画風を確立している。とはいえ、あまり新たな表現を追求していたわけでもないようである。

彼は画面の構成にはさほど関心を示さないが、賛には常に新たな詩文を求めていた。第二章で紹介した漢詩と画論の摘録と同じく、鉄翁は目にした作品の賛からも知識を吸収していた。

(3) 縮図冊にみる来船清人

一方、明らかに学習目的ではなく、備忘のための縮図もある。例えば、田能村竹田が鉄翁に贈った絵（『古今縮図』①五丁）や、嘉永七年（一八五四）、鉄翁が来船清人・顔亮生に請うた梅図などが写されており（『古今縮図』①九丁）、梅図の落款には「時甲寅又七月過門奉訪 鉄翁老禪師囑写 改腕是答 顔亮生」と書いてある。このように贈与書画の記録としても、縮図が作成されている。

縮図冊には徐雨亭と王克三の作品も多く記録されている。二人とも太平天国の乱を避けて来日した文人であり、その作品の縮図の構成から大半は画帖であることが分かっている。『古今縮図』②には徐雨亭が長崎で描いた山水帖から、絵と落款共に縮写されている。

『縮図拔萃』②の三十九丁と四十丁には徐雨亭と王克三の合作帖から縮写されている。画題は花卉果疏と四君子である。なかに「雨亭作於申江」の落款があるため、上海での作品であることが分かる。また、同じく『縮図拔萃』②の四十五丁と四十六丁にも二人の山水合作帖から縮写されている。「丁卯秋月写於申江応木下瓊江先生雅属即希方家正之 徐雨亭」と「内画冊幀煩交瓊江先生收啓 八月下旬

徐雨亭憲」の落款と覚書もきちんと記録されている。さらに、画帖と共に送られてきた逸雲宛徐雨亭書簡の写しも四十八丁に載せられている。このように、徐雨亭と王克三は、帰国した後も長崎の文人たちとの文通を続け、書画を送付していたことが分かる。宛先の木下逸雲は、この二人の作品を高く評価し、かつて倉野篁園に以下のように語っていた。

今や支那の内乱避て滞崎する舶客中、文人墨客と称すべき者、王克三、徐雨亭の二人あり。克三は儒者にして、稼圃以来の能書、而して猶ほ能く一家の梅を画く。雨亭は朱文光同門の人に於て、水墨山水得意として、浅絳の着色をも喜ばす。子其れ余輩の画数幀を求めんよりは、宜く彼れに就て随意の筆を乞はば、以て後世の宝と為すに足らんと。（『鉄翁画談』）

これを受けて篁園は翌慶応元年（一八六五）春長崎に赴き、王克三に純本二幀を求め、徐雨亭に明紙巨幅二枚を請うた。後に鉄翁は徐雨亭の二幅を観る機会を得て、「禪師曰く、我れ雨亭の画を見ること少からずと雖ども、未だ曾て高尚と称するに足る者あるを見ず。然るに此二大幅は頗る意を注ぎてこれを写出し、稀有の大景中一筆の滞気あるを見ず。」（『鉄翁画談』）と評していた。また同席の門人・養浩（松浦屋勘兵衛）も鑑識眼の持ち主であり、同じ意見を述べていた。

したがって、縮図冊にみる徐雨亭・王克三作品の縮臨は、傾慕による学習のため、というより、往來の記録として残していたと読み取ることが妥当であろう。

来舶清人の小品の記録は他にも数点ある。『古今縮図』①の十丁には林夢龍・王蘭亭・鈕心園・顔亮生の題と款が記録されており、「己酉春仲」「己酉花月」などからは嘉永二年（一八四九）二月と分かる。また顔亮生の題の上に鉄翁は「合作題字」と記している。絵画の内容も作者も不明だが、題からは絵の題材が四君子であると推測できる。書画会で揮毫されたものの可能性もあり、また唐館の在館者たちが共に題字を記して日本人に贈与したものである可能性もある。また同冊の二十七丁には林夢龍・顧子翼・陳吉人・傅雲濤・奚梅の款が記されており、いずれも嘉永四年（一八五二）三月のものである。ここでは十丁と異なり、画賛の内容が省略され、款識のみが記録されている。鉄翁は、揮毫者の顔ぶれが気になっていたようである。

席書や合作幅だけではなく、来舶清人が舶來の書画を鑑賞して書いた題記も鉄翁は記録している。嘉永四年正月、銭少虎と陳逸舟は揚州八怪の一人・華岳（二六八二—一七五六）のある絵に題を揮毫した。絵の正体は不明だが、二人の題のみが『古今縮図』①二十五丁と三十七丁に写されている。鉄翁は明らかに作品より題のほうに関心を持ち、二回も写している。三十七丁では銭少虎題箋の「辛亥」

や「穀」の字を再三書いているため、書を練習していたのではないだろうか。

鉄翁の縮図冊を通じて、当時の長崎における書画交遊の一隅を窺うことができた。縮図を写し、作品を記録することは、必ずしも書画を学習するためではなく、記録が目的の場合もあり、または風流を見習うのが目的のものも見受けられる。

まとめ

鉄翁祖門は江稼圃に師事したものの、師の画風はあまり取り入れおらず、倪瓚・黄公望の画法をベースにした様式は、むしろ新安派と共通する趣があり、さらには呉派の雅趣をも汲み取っていたのではないかと考えられる。このような鉄翁の画風の好みは、縮図冊からも分かるように、彼が南宗画を大量に鑑賞してきたことによるのであろう。

一方、鉄翁の縮図冊には、師の江稼圃が属する四王派への関心も少なからず認められる。四王派の作品や、画家の伝記などを学習していたことは縮図冊を通じて確認できる。しかし江稼圃の指導に従っていたにもかかわらず、鉄翁は仿古、すなわち古代大家の筆法を模倣することにはあまり興味を示さず、晩年の作品では韻致の表現を中心に、南宗画の精神性を求めていたと考えられる。これに

よって到達した独自の画風には、疎放な湿筆、大面積の墨塗り、全体的に淡い色表現など、中国南宗画とはやや異なり、日本南画の特徴も示されている。同様の特徴は、鉄翁以降の南画にもしばしば確認できる。

鉄翁の画業を支えた重要な基盤は、一つは来舶清人・江稼圃との直接的な交流、もう一つは長崎における豊富な書画資源と情報であった。縮図冊に記録されている書画の内容を整理・分析することで、十九世紀中期以降、明末以降の南宗画が日本に大量輸入されていたことが分かる。幕末には、長崎と江南地方との交流が活発化して、同時代作家の作品も多く伝来していた。これによって、来舶清人に教わった知識や情報を、実見した作品と照合することができるようになった。縮図冊には、画論や画譜の学習の跡も少し確認できるが、実作品の鑑賞による学習が最も主要な手段であったと考えられる。舶載作品の主要なものは、もちろん二、三流の画家の作品であり、贋作も多く含まれていたと考えられる。しかし、清王朝の崩壊によって帝室収蔵が流出する前の時期、清においても民間の画人・文人が目に見える書画の範囲はかなり狭かつたはずだ。したがって、鉄翁が実見した舶載作品の内容は、彼が学習したいわゆる二、三流の中国画家たちが観ていた書画作品の内容と、それほど変わらなかつたのではないかと推測できる。

画法や画面表現の学習のほか、『佩文齋書画譜』など類書も利用さ

れていたことは縮図冊を通じて確認できる。画賛に使われる詩や画論をあらかじめ摘録しておくこと、そして抄写という行為自体も、賛文の内容を吟味する作業となつただろう。鉄翁が漢文を書けたという証拠は管見の限り確認できず、おそらく読解しかできなかったのではないかと考えられる。もちろん、漢詩を作ることもできない。そのため自作の題は、類書から抄出した詩や画論を借用するしかない。類書を使って文人としての教養不足を補い、詩書画一体の文人絵画を制作することは、一般的な手段であつただろう。田能村竹田のような漢詩もよくする画人は、あくまでも少数である。

鉄翁の縮図冊にみる来舶清人との交流は一端に過ぎないが、その頻度や自由度は、十八世紀のそれを遥かに越えている。十九世紀の長崎における来舶清人との書画交遊については別稿に譲りたいが、少なくとも鉄翁の場合には、来舶清人の書画を盲目的に崇めることや、その反発として貶すなど、十八世紀によく見られた来舶清人への評価をめぐる葛藤がない。徐雨亭の作品に対する評価、徐雨亭・王克三が帰国した後も持続していた文通と書画贈答を見ると、鉄翁と来舶清人との交友関係は対等であつたことがうかがえる。

作品と縮図資料を比較することで、鉄翁が最新の明清画を熱心に勉強しながら、自分なりの理解も加えて画法を吸収していたことが分かる。それでも、南宗画という高く掲げる理想を目指しつつも、到底、前人の表現の領域を出ることはなかつた。一方、そのような

彼が高名を得たのは、人的ネットワークにおける立ち位置とも関係があったと考えられる。鉄翁に入門した数多くの遊学者たちが、鉄翁の名を全国へ広めた。しかし遊学者たちが長崎に長旅をしてまで求めたのは、鉄翁の画そのものではなく、むしろ長崎にある豊かな書画資源であったのかもしれない。彼らはおそらく鉄翁と同じ方法で書画を学習し、また同様の作品を観ていたであろう。換言すれば、遊学者が長崎で得た情報、観た書画の内実、彼らが長崎まで足を運んで求めたことを、鉄翁の例を通じて一瞥することができる。このように、縮図冊は単なる一画人の私的な記録ではなく、幕末の長崎における中国画の流通状況を示す一つのコレクションとして理解してもいいであろう。

この意味で、長崎という開かれた空間の中で、幕末には中国江南地域に近似する書画空間が形成されていたと考えられる。中国への渡航が不自由な時期に、中国の画学、特に南宗画の正確な知識を蓄えることができた場所は、異文化との境目が曖昧な長崎であった。田能村竹田が提起した長崎派の内実と位置付けを理解するために、このようなボーダーレスな書画空間の実像をさらに解明する必要がある。舶載書画の流通の他に、来舶清人をめぐる交遊活動、及び長崎遊学者の移動にみる長崎と中央・地方画壇との関連も視野に入れ、三都に対する長崎画壇の位置付けを再考することは、中央画壇の外部からの視点を新たに発見することにつながり、今後の課題である。

注

- (1) 田能村竹田筆《風雨渡谿図》自題、竹田筆《蔬菜争奇図》自題、大分県教育庁管理部文化課編『大分県先哲叢書 田能村竹田 資料集 絵画篇』大分県教育委員会、一九九二年、図版458、234。
- (2) 梅澤精一『日本南画史』南陽堂本店、一九一九年、八六九頁。
- (3) 永見徳太郎『長崎の美術史』夏汀堂、一九二七年。
- (4) 古賀十二郎『長崎画史彙伝』大正堂書店、一九八三年。
- (5) 中島榮一郎『鐵翁随感』、『長崎談叢』第一輯、一九二八年、林源吉の「畫僧鐵翁と漁村野母」(『長崎談叢』第十二輯、一九三三年)と「鐵翁と逸雲」(『長崎談叢』第二十七輯、一九四〇年)、増田廉吉「畫人 鐵翁を繞る人々 其の一〜四」(『長崎談叢』第二十三、二十六―二十八輯、一九三八―一九四一年)。
- (6) 鶴田武良「研究資料 鐵翁 逸雲 湘颯について」、『國華』第一〇九八号、一九八六年。鶴田武良「研究資料 校刊『鐵翁書簡・附鐵翁宛書簡』」、『美術研究』(三三一)、一九八八年。また『國華』では二点の鐵翁筆《春景山水図》(第四九七、六〇七号)が紹介されている。
- (7) 前掲永見徳太郎『長崎の美術史』、九四頁。家業が紺屋である記録は、他に未見である。杉原夷山「長崎の三大家」(『書畫骨董雜誌』七三―七五)では家業が桶屋であると書いてある。なお、鐵翁の生家は長崎県西彼杵郡野母村にあるという説もある(前掲林源吉「畫僧鐵翁と漁村野母」)。
- (8) 「大光寺過去帳」・寛政四壬子 正月七日 一妙念 銀屋町 日高三五良祖母ノ寛政十三辛丑 正月廿二日 一普念 磨屋町 日高勘右衛門事(渡辺庫輔『祖門鐵翁』から引用)。
- (9) 同上。
- (10) 江稼圃に師事、花鳥・山水に長じる。前掲古賀十二郎『長崎画史伝』、二三九頁を参照。
- (11) 妙玄が法名であることは、後述石崎融思筆「華岳山小景図」によって分

かる。

(12) 天保四年鉄翁が彫った春徳寺世代図によると、鉄翁は第十五世である。

越中哲也編『長崎春徳寺史』私家本、一九八一年、三四頁。

(13) 同上。

(14) 小原克紹著、森永種夫校訂『続長崎実録大成』巻六「寺院経営之下」、
『長崎文献叢書 第1集 第4巻』長崎文献社、一九七四年、二二七頁。

(15) 前掲鶴田武良「研究資料 鉄翁 逸雲 湘颯について」。

(16) 前掲増田康吉「畫人鐵翁を繞る人々 其の一〜四」。

(17) 長崎市立博物館編『長崎市立博物館資料図録VI——所蔵名品編』長崎市
立博物館、一九九八年、一〇八頁。

(18) 御園生翁甫編『防府史料 第七輯』防府史料保存会、一九六三年、一頁。

(19) 原文は倉野焯園『鉄翁画談』（鴻盟社、一八八五年）を参照。

(20) 前掲倉野焯園『鉄翁画談』。

(21) 藤岡作太郎『近世絵画史』べりかん社、一九八三年、一九七頁。

(22) 『墨林今話』の版本と編集については頼毓芝《從〈墨林今話〉の編輯看明治初年中日文化圏の往來》（《美術史研究集刊》第二七期、二〇〇九年）を参照。

(23) 長崎県立美術館編『唐絵目利と同門』、長崎県教育委員会、一九九八年、七一頁。

(24) 前掲古賀十二郎『長崎画史彙伝』、二四七頁。

(25) 若木太一ほか執筆、植松有希編『小西家所蔵・南画家木下逸雲資料目録』、
調査報告、二〇一二年、粉本・人物図11。

(26) 渡辺庫輔『鐵翁逸雲梧桐梅泉墨酣年譜』。

(27) 前掲倉野焯園『鉄翁画談』。

(28) 江稼圃の生涯と渡日経歴について、唐権「蘇州江氏家族来船清人考——
稼圃、芸閣、星奮の生平與赴日経歴」（金程宇編『域外漢籍研究集刊』第二
十四輯、中華書局、二〇一二年）を参照。

(29) 古原宏伸「波濤を越えて」渋谷区立松濤美術館『橋本コレクション 中国

の絵画——来船画人』渋谷区立松濤美術館、一九八六年、一六一—一九頁。

(30) 森鷗外「伊澤蘭軒」『鷗外全集 第十七巻』、岩波書店、一九七三年、二二
二頁。

(31) 金井俊行『増補長崎略史 第六巻』長崎市役所編『長崎叢書（下）』原書
房、一九七三年、二六七頁。梅泉は享和元年（一八〇一）十六歳で稽古通
事となり（宮田安『唐通事家系論攷』長崎文献社、一九七九年、一二二頁）、
江稼圃に入門したのは十九歳から二十五歳、すなわち江稼圃が初めて来朝
した文化元年（一八〇四）から文化七年の間であると推測されている。大
田南畝が、長崎に支配勘定として着任した文化元年に江稼圃と知り合いに
なった（『瓊浦雜綴』濱田義一郎編『大田南畝全集 第八巻』岩波書店、一
九八六年、五一—五頁）ことから、南畝とも親交する梅泉が、この時に江稼
圃に入門した可能性は十分ある。

(32) 例えば遊竜梅泉を邦彦に間違えたり、鉄翁が邦彦から江稼圃の画法を得
たりしたことなど（前掲古賀十二郎『長崎画史彙伝』二四七頁）。また陳逸
舟の師王源について、清画家には同名の人物が二人いるが、いずれも王肇
との関係は不明である（俞劍華編『中国美術家人名辞典』上海人民美術出
版社、二〇〇九年、一一五頁）。

(33) 前掲渋谷区立松濤美術館『橋本コレクション 中国の絵画——来船画人』
図59。

(34) 前掲古賀十二郎『長崎画史彙伝』一三三—一三二頁。

(35) 前掲永見徳太郎『長崎の美術史』一三七頁。

(36) 米沢嘉圃『江稼圃筆 做黄公望山水図』『國華』第九三九号、一九七一年。

(37) 前掲鶴田武良「研究資料 鉄翁 逸雲 湘颯について」。

(38) 恩賜京都博物館編『長崎派写生・南宗名画選』（便利堂、一九三九年）で
は『青緑山水図』と題する。

(39) 長崎県立美術館『長崎を訪れた中国人の絵画』長崎県立美術館

一九八三年、江蘇3-1。

- (40) 例えば前掲『長崎派写生・南宗名画選』所収の《溪山飛泉図》(無紀年)と『山水図』(嘉慶二十二年、一八一七)がある。
- (41) 古賀十二郎が言及した木下家の鉄翁粉本は、署名がないため今回は論外にする(前掲古賀十二郎『長崎画史彙伝』二四七頁)。
- (42) 前田淑『鉄翁画談』と倉野燠園『勉誠社、一九八二年、一九六頁。
- (43) 相馬九方(一八〇一—一八七九、名は肇、字は元基)は讃岐出身、和泉岸和田藩校「講習館」で教授を務めた儒者である。
- (44) 『鉄翁画談』では、黄慎の作品に言及している。
- (45) 前掲鶴田武良「研究資料 校刊『鉄翁書簡・附鉄翁宛書簡』」、四。
- (46) 『佩文齋画説輯要』には張懷の画論が収録されていないため、鉄翁はこの摘録本ではなく元の『佩文齋書画譜』を使っていたことが分かっている。
- (47) 脇本十九郎「探幽縮図について」『美術研究』(四)、一九三二年。
- (48) 同上。
- (49) 王寅を除外した理由は後文で触れる。また付録「鉄翁筆縮図冊所見作品」では同じ理由で王寅を来舶中国人から除外した。
- (50) 宗像晋作「高橋草坪の山水画——明清画受容の二様相」出光美術館編『出光美術館研究紀要』第十八号、二〇一二年。
- (51) 杉本欣久「江戸後期の「展覧録」と「款録」にみる中国書画」黒川古文化研究所編『古文化研究・黒川古文化研究所紀要』(十二)、二〇一三年。
- (52) 同上。
- (53) 前掲古賀十二郎『長崎画史彙伝』、五四五頁。
- (54) 鈴木敬編『中国繪畫總合圖録 第四卷 日本篇Ⅱ 寺院・個人』東京大学出版会、一九八三年、JP17-001。
- (55) 渋谷区立松濤美術館『中国絵画をたのしむ——橋本コレクションを中心に』渋谷区立松濤美術館、一九九八年、図27。

図版出典一覧

- 図1 鉄翁《水墨山水図》…春徳寺蔵、筆者撮影。
- 図2 鉄翁《西山記》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図3 鉄翁《浅絳山水図》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図4 鉄翁《浅絳山水図》…豊後日田町千原家所蔵品入札、東京文化財研究所売立目録アーカイブ、美研102120017。
- 図5 鉄翁《着色松林滝山水図》…高松市塩田氏所蔵品入札、東京文化財研究所売立目録アーカイブ、美研04810019。
- 図6 鉄翁《山水図》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図7 鉄翁《山水図》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図8 鉄翁《水墨山水図》…小林家及某家御蔵品売立、東京文化財研究所売立目録アーカイブ、美研04610030。
- 図9 江稼圃《山水図》…「江稼圃筆山水圖(玻璃版)」『國華』第三四九号、一九一九年、四四九頁。
- 図10 江稼圃《秋景山水図》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図11 江稼圃《清谿重嶺図》…個人蔵。
- 図12 鉄翁《秋景山水図》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図13 鉄翁《谿山無尽図》…恩賜京都博物館編『長崎派写生・南宗名画選』、便利堂、一九三九年、図110。
- 図14 鉄翁《山水図》…春陽軒並某家所蔵品入札、東京文化財研究所売立目録アーカイブ、美研17220034。
- 図15 鉄翁《秋景山水図》…メトロポリタン美術館蔵。
- 図16 鉄翁《山水図》…長崎歴史文化博物館蔵。
- 図17 鉄翁《雪景山水図》…長崎南山手美術館蔵、筆者撮影。
- 図18 鉄翁《冬山密雪図》…熊本県立美術館蔵、筆者撮影。
- 図19 鉄翁《雪景山水図》…ミネアポリス美術館蔵。
- 図20 『古今書画縮図』第一・二冊、『縮図拔萃』『画論拔萃山水花卉縮図』表紙…

長崎歴史文化博物館蔵、筆者撮影。

図21、23、25、26 鉄翁『古今書画縮図』第二冊、長崎歴史文化博物館蔵、筆者撮影。

図24 祁彥佳《書画冊》第1図…個人蔵、渋谷区立松濤美術館編『中国絵画のたのしみ——橋本コレクションを中心に』渋谷区立松濤美術館蔵、一九九八年、図27。

図27 鉄翁『縮図拔萃』、長崎歴史文化博物館蔵、筆者撮影。

図28 鉄翁『古今書画縮図』第一冊、長崎歴史文化博物館蔵、筆者撮影。

図29 江稼圃《天平幽境図》…長崎歴史文化博物館蔵。

図30 鉄翁『画論拔萃山水花卉縮図』、長崎歴史文化博物館蔵、筆者撮影。

図31 沈周《古木寒鴉図》…《纽约苏富比拍卖有限公司1988年秋季中国书画拍卖图录》図8、田洪・田琳編著《沈周绘画作品编年图录上》（天津人民美術出版社、二〇一二年、四六頁）より引用。

謝辞

本研究にあたり、長崎華嶽山春徳寺住職平野和紀氏、長崎南山手美術館の常川和宏氏、長崎歴史文化博物館の長岡枝里氏、熊本県立美術館の金子岳史氏には調査の機会を賜り、その厚意に厚く御礼申し上げます。なお本研究は出光美術館助成事業部の研究・調査助成（2021-4-2022-3）、及びJSPS科研費22K11428の助成を受けた研究の成果である。

付録 鉄翁筆縮図冊所見作品

【凡例】 ▲：日本人 ●：来舶中国人 ○：部分的な縮図あり ◎：完全な縮図あり □：判読不能 ㊦：判読不確定
 A：古今書画縮図（古今縮図①） B：古今書画縮図（古今縮図②） C：縮図拔萃（縮図拔萃①） D：画論拔萃山水花卉縮図（縮図拔萃②）

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
1	A三ウ	花卉	○	1682	顧原		浙江紹興
2	A四ウ	蘭か		1855	山田梅村▲	1816-1881	伊予国
3	A五オ	花卉(鉄翁に贈る)	○	江戸、19世紀	田能村竹田▲	1777-1835	豊後国
4	A五オ	花卉か		江戸	松山陶鴻▲		
5	A六オ	果蔬(菜根図)	◎	清、18世紀	高鳳翰	1683-1749	山東/江蘇揚州
6	A六オ	果蔬(九華図)	◎	清、18世紀	高鳳翰	1683-1749	山東/江蘇揚州
7	A七オ	山水(弁峯秋霽図)	◎	元	倪瓚	1301-1374	江蘇無錫
8	A七ウ	果蔬(丹莖図)	◎	清、18世紀	高鳳翰	1683-1749	山東/江蘇揚州
9	A八オ	果蔬(做十竹齋)	◎	清、18世紀	高鳳翰	1683-1749	山東/江蘇揚州
10	A九ウ	梅(鉄翁に贈る)	◎	1854	顔亮生●	[1844-安政頃]	
11	A一〇オ	書			江稼圃●	1746-1826 [1805-文政頃]	江蘇蘇州
12	A一〇ウ	合作題字		1849	林夢龍●		
13	A一〇ウ	蘭竹芝		1849	華昆田●	[1842-1851頃]	
14	A一〇ウ	合作題字		1849	王蘭亭●	[1846-1853]	
15	A一〇ウ	合作題字		1849	鈕心園●	[1840-1850]	
16	A一一オ	合作題字		1849	顔亮生●	[1844-安政頃]	
17	A一二オ	花か	○	清、19世紀	楊覺三●	[天保頃]	江蘇蘇州
18	A一二オ	花		清、19世紀	沈萍香●	[1831-1846]	江蘇蘇州
19	A一三ウ	竹(做李夫人)		清、19世紀	夏東旭		江蘇蘇州
20	A一四オ	蘭		1854	庭洵		
21	A一四ウ	蘭竹靈芝図			蒲郎		
22	A一四ウ	書			縣村生		
23	A一四ウ	書			竹庵主人		
24	A一五ウ	蘭か(做陳淳)			淵泉		
25	A一五ウ	蘭か			鉄丹		
26	A一六オ	水仙か		清、17世紀	木庵●	1611-1684	福建晉江
27	A一六オ	蓮か(做王武)			抔華		
28	A一七オ	山水	○	明	張翬		江蘇太倉
29	A一八オ	題跋か			泰圃		
30	A一八オ	米法水墨山水		清、18世紀	費晴湖●	[安永頃-1796]	浙江湖州
31	A一八オ	牡丹		清、18-19世紀	孫桐		
32	A一八ウ	花卉	○		馮宗海		
33	A一八ウ	山水			田浩		
34	A一九オ	山水	○	1791	葉道本		江蘇湖北
35	A一九ウ	山水	◎	1805	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
36	A二一オ	書		清、19世紀	沈萍香●	[1831-1846]	
37	A二一ウ	雲樵図		明	王問	1497-1576	江蘇無錫
38	A二一ウ	梅か		元	王冕	1287-1359	
39	A二一ウ	蓮か		清、18世紀	費晴湖●	[安永頃-1796]	浙江湖州
40	A二三オ	自題か		清、19世紀	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
41	A二四オ	竹(做管道昇)		1848	陳逸舟●	[1827-嘉永頃]	浙江
42	A二五オ	華岳画題筌		1851	錢少虎●	[1847-1860]	
43	A二五オ	華岳画題跋		1851	陳逸舟●	[1827-嘉永頃]	浙江
44	A二六ウ	花卉(臨陳淳)		清、18世紀	辺寿民か	1684-1752	江蘇淮安
45	A二六ウ	花卉	○	清、1748か	陳棠		浙江温嶺
46	A二七オ	花卉	○	清、19世紀	顔亮生●	[1844-安政頃]	
47	A二七オ	梅菊	○	1853	陳逸舟●	[1827-嘉永頃]	浙江
48	A二七ウ	紫薇花題		清、19世紀	翟大坤	?-1804	浙江嘉興/蘇州
49	A二七ウ	黃蜀葵題		清、19世紀	翟大坤	?-1804	浙江嘉興/蘇州
50	A二七ウ			1851	林夢龍●		
51	A二七ウ			1851	顧子翼●		

(付録つづき)

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
52	A二七ウ			1851	陳吉人●		江蘇崑山
53	A二七ウ			1851	林夢龍●		
54	A二七ウ			1851	傅雲濤●		
55	A二七ウ			1851	奚梅●		
56	A二八オ	山水(倣沈周)	◎	1850	陳逸舟●	[1827-嘉永頃]	浙江
57	A二八ウ			江戸、19世紀	田能村竹田▲	1777-1835	豊後国
58	A二八ウ			江戸、19世紀	田能村竹田▲	1777-1835	豊後国
59	A二八ウ	山水		清	華岳	1682-1756	福建上杭/浙江杭州
60	A三一オ	山水(模燕文貴)	◎	清	奚岡	1746-1803	浙江杭州
61	A三二ウ	山水(黄公望意)		明	藍瑛	1585-1664	浙江杭州
62	A三三オ	山水(董其昌法)	○	明、17世紀	王端	1591-1644	浙江平湖
63	A三三ウ	花卉	○	1851	華昆田●	[1842-1851頃]	
64	A三四オ	書		1805	江稜圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
65	A三四オ	山水		清	沈唐		浙江杭州/江蘇蘇州
66	A三四オ	人物か(羅浮仙影)		1849	陳逸舟●	[1827-嘉永頃]	浙江
67	A三五ウ	竹	○	清、17世紀	木庵●	1611-1684	福建晉江
68	A三五ウ	菊	○	清、17世紀	木庵●	1611-1684	福建晉江
69	A三六オ	米法山水(鉄翁に贈る)	○		毛臬●?		
70	A三七オ	華岳画題筈		1851	錢少虎●	[1847-1860]	
71	A三七オ	華岳画題跋		1851	陳逸舟●	[1827-嘉永頃]	浙江
72	B一オ	山水	◎	1753	黄琛		浙江杭州
73	B一オ	花卉	◎	清、17世紀	王武	1632-1690	江蘇蘇州
74	B一ウ	山水(黄公望意)	○		沈惠干		江蘇蘇州か
75	B一ウ			明	周之冕	1521-?	江蘇蘇州
76	B一ウ			明	董其昌	1555-1636	上海松江
77	B一ウ			明末か	曹泰然		
78	B一ウ	梅			□□源		江蘇蘇州
79	B二オ	水仙墨梅題		明	文徵明	1470-1559	江蘇蘇州
80	B二オ			明	文徵明	1470-1559	江蘇蘇州
81	B二オ	山水か(倣王蒙)		清	欽楫		江蘇蘇州
82	B二ウ	山水	○		谿璵		
83	B三オ	山水	◎	明、1624か	陳元揆		
84	B三オ	山水	◎	1627	李流芳	1575-1629	安徽歙県/上海嘉定
85	B三オ	山水	◎	清、1661か	顧大申		上海松江
86	B三ウ	梅(呉鎮意)	◎	1862	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
87	B三ウ	米法山水	◎	1862	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
88	B三ウ	山水	◎	1862	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
89	B四オ	山水(倣元人筆意)	◎	清	沈宗敬	1669-1735	上海松江
90	B四ウ	山水	○		張于		江蘇常州
91	B五オ	菊	◎	1671	金俊明	1602-1675	江蘇蘇州
92	B五オ	花卉(法孫克弘)	○		許傑		
93	B五オ	花卉	○		許傑		
94	B五ウ			清	汪士鋐	1658-1723	江蘇蘇州
95	B五ウ	ブドウ	◎	1637	魏之璜	1568-1647	江蘇南京
96	B五ウ	山水	○	1779	謝谷		江蘇南通
97	B五ウ	山水	○	清	陸遠		
98	B六オ	山水(董源法)		清、17世紀	藍瑛	1585-1666	浙江杭州
99	B六オ			清	李馥堂		四川合川
100	B六オ				横雲□山人		
101	B六オ			1748	李觴	1686-?	江蘇興化/江蘇揚州
102	B六ウ			清	孫樹峰		浙江餘姚
103	B六ウ	山水(董源法)		1676	查士標	1615-1698	安徽休寧/江蘇揚州

(付録つづき)

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
104	B 六ウ			清、17世紀	龔賢	1618-1689	江蘇崑山/江蘇南京
105	B 七オ	書か			姚水癡		浙江杭州
106	B 七オ	山水(倣董其昌)	○	清、17世紀	朱軒	1620-1690	上海松江
107	B 七オ	山水	○		載峻		
108	B 八オ	山水		元	倪瓚	1301-1374	江蘇無錫
109	B 八オ	倪瓚画題跋		1634	吳偉業	1609-1672	江蘇崑山
110	B 八オ	倪瓚画題跋		1844	陸機		
111	B 八ウ	書			範長発(柏堂)		
112	B 八ウ	十五松山房詩冊		清、17世紀	陸次公		
113	B 八ウ	十五松山房詩冊題		清、17世紀	張大鋪か(鹿樵)		江蘇常熟
114	B 八ウ	十五松山房詩冊題		清、17世紀	魏裔介	1616-1686	河北柏郷
115	B 八ウ	十五松山房詩冊題		清、17世紀	龔鼎孳	1615-1673	安徽合肥
116	B 九オ	十五松山房詩冊題		清、17世紀	施維翰	1622-1684	上海松江
117	B 九オ			明	倪元璐	1594-1644	浙江上虞
118	B 九ウ	書		清	顧成天	1663-1744	上海
119	B 一〇オ～ 一一ウ	山水画帖(内四図)	◎	1780	奚岡	1746-1803	浙江杭州
120	B 一二オ	書			李東河		
121	B 一二オ	書		1693	孫岳頌	1639-1708	
122	B 一二ウ	合作竹石図	○	1636	馮起震	1553-1644	山東益都
123	B 一二ウ	合作竹石図	○	1636	馮可賓		山東益都
124	B 一三オ	山水	◎	清	陸灝		上海松江
125	B 一三ウ	山水	◎	清	韓曠		上海松江
126	B 一四オ	山水	◎	清	陸坦		上海松江
127	B 一四ウ	竹石	◎	清	佟国瑀		
128	B 一四ウ	蘭(銭朝鼎法)	○	清	阮生		
129	B 一五オ	山水	◎	清	石頤		江蘇如皋
130	B 一五ウ	書		清	馮汝軾		
131	B 一五ウ	書		清	楊中訥	1649-1719	浙江海寧
132	B 一五ウ	花卉	○	清	蔣廷錫	1669-1732	江蘇常熟
133	B 一五ウ	花卉か	○	清	蔣廷錫	1669-1732	江蘇常熟
134	B 一五ウ	山水(倣倪瓚)	○		陸壘		
135	B 一五ウ	果物か	○	清	蔣廷錫	1669-1732	
136	B 一六オ	倣管夫人竹窩図	○	1707	範廷鎮		江蘇常州
137	B 一六オ				李道修		
138	B 一六ウ	花卉	○	清	蔣廷錫	1669-1732	江蘇常熟
139	B 一六ウ	山水	○		陳楸		
140	B 一六ウ	果物か	○	明	程嘉燾	1565-1643	浙江杭州/上海嘉定
141	B 一六ウ	合作	○		王広川		
142	B 一六ウ	合作	○		潘增潤		
143	B 一七オ	山水	○		大口張彦		
144	B 一七オ	山水(倣趙孟頫)	◎	1635	朱治憫		江蘇常熟
145	B 一七オ			明	米萬鐘	1570-1628	陝西/北京
146	B 一七ウ	録晋人菊花賦			朱渡		
147	B 一七ウ			明	趙珣(趙之璧)		福建莆田
148	B 一八オ	花卉果蔬画帖か	○		朱渡		
149	B 一八ウ			清、17世紀	王鐸	1592-1652	河南孟津
150	B 一八ウ	書		清、18世紀	鄭燮	1693-1765	江蘇興化/江蘇揚州
151	B 一八ウ	書		清	陳鴻寿	1768-1822	浙江杭州
152	B 一八ウ			清、17世紀	項聖謨	1597-1658	浙江嘉興
153	B 一八ウ	山水	◎	清	秦涵		安徽歙県か
154	B 一九オ	書		清	汪士鋐	1658-1723	江蘇蘇州
155	B 一九オ	竹石か	◎	1636	婦昌世	1573-1644	江蘇崑山/江蘇常熟
156	B 一九オ	山水	◎	清、18世紀	曹廷棟	1699-1785	浙江嘉善

(付録つづき)

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
157	B一九ウ	山水(遠浦歸帆)	○	1605	宋旭	1525-?	浙江嘉興(一説湖州)
158	B一九ウ	花卉か(金粉露華、徐崇嗣法)			紅鷺		
159	B一九ウ	山水(傲董源)	◎	1668	祁豸佳	1594-1683	浙江紹興
160	B一九ウ	山水	◎		成大口		
161	B二〇オ	山水	◎	1791	張洽	1718-?	江蘇蘇州(異説あり)
162	B二〇ウ	山水	◎	明	董孝初		上海華亭
163	B二〇ウ	樹石(王紱筆意)	◎	清	龔御		上海松江
164	B二一オ	山水(黄公望法)	◎		符六		
165	B二一オ	菊石(呉鎮法泉石晚春図)	◎	1656	藍瑛	1585-1664	浙江杭州
166	B二一ウ	山水(黄公望法)	◎	1742	王昱		江蘇太倉
167	B二二オ	山水(董其昌法)	◎	清	奚岡	1746-1803	浙江杭州
168	B二二ウ	山水	◎	1636	李杭之	?-1644	安徽歙県
169	B二三オ	曹垂星画題跋		1666か	陸晋錫		上海か
170	B二三オ	山水	◎	1666か	曹垂星		上海松江
171	B二四ウ	柿(百事如意、鉄翁に贈る)	◎	1863	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
172	B二四ウ	梅(鉄翁に贈る)	◎	1863	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
173	B二四ウ	山水(夏壑松陰)			何璉		
174	B二四ウ	山水(傲米芾雲山図)		1786	奚岡	1746-1803	浙江杭州
175	B二五ウ	花果(年号と年齢が合わないため贋作か)	◎	1535	謝時臣	1487	江蘇蘇州
176	B二五ウ	花卉(三秋競艶)	◎	明	陳淳	1483-1544	江蘇蘇州
177	B二六オ	山水(傲呉鎮)	◎	清、19世紀	王寅	[明治10年代]	江蘇南京
178	B二六ウ	山水(沈周意)	◎	1792	孔毓雲		福建上杭
179	B二六ウ	花卉	◎	1792	孔毓雲		福建上杭
180	B二七オ	山水(沈周法)	◎	清、19世紀	王寅	[明治10年代]	江蘇南京
181	B二七ウ	山水(傲倪瓚)	◎	1812	履泰		
182	B二八ウ	山水(傲董其昌)	○	清	潘思牧	1756-?	江蘇鎮江
183	B二八ウ	山水	○	清	米漢雯		
184	B二九ウ	山水		清、17世紀	查士標	1615-1698	安徽海陽
185	B三一オ～ 三二オ	傲古山水画帖(撫古十二幀、内五図)	◎	1679	呉歴	1632-1718	江蘇常熟
186	B三一ウ	題跋か			沈璉		
187	B三三ウ	臨董其昌跋語		清	王文治	1730-1802	江蘇鎮江
188	B三四ウ	山水	◎		戴天瑞		江蘇蘇州
189	B三五オ			1865	李活泉●		
190	B三五オ			1865	林雲達●	1828-? [1863-明治10年代]	広東四会県
191	B三五ウ	書		清、18世紀	顧光旭	1731-1797	江蘇無錫
192	B三五ウ	山水(黄公望法)	○	清、18世紀	鮑楷		安徽歙縣/江蘇揚州
193	B三六オ	山水	○	清	唐棣		上海
194	B三七ウ	竹	○	清	鄭燮	1693-1765	江蘇興化/江蘇揚州
195	B三八ウ	梅	◎	明	陳繼儒	1558-1639	上海松江
196	B三八ウ	山水(秋江待渡)	◎	清、18世紀	伊孚九●	1698-? [1720-1747]	江蘇蘇州
197	B三九オ～ 三九ウ	書画冊(内三図)	◎	清、17世紀	祁豸佳	1594-1683	浙江紹興
198	B四〇オ			明	張璠	1570-1641	福建晉江
199	B四〇オ	山水か(呉鎮法)		清、18世紀	馬豫		陝西綏徳/江蘇南京
200	B四〇オ			1633	李因	1616-1685	浙江杭州
201	B四〇オ	李因画跋		明	葛徵奇	?-1645	浙江海寧
202	B四〇オ	石澗		清	石澗	1642-1707	広西桂林/湖北武昌

(付録つづき)

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
203	B 四〇ウ	山水か(仿古十二幀)		清	張問陶	1764-1814	四川遂寧/江蘇蘇州
204	B 四一オ	山水	◎	清	王宜		江蘇太倉
205	B 四一ウ	山水	◎	清、18世紀	王宸	1720-1797	江蘇太倉
206	B 四二オ	山水	◎	清、19世紀	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
207	B 四二ウ	山水(王蒙意)		1864	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
208	B 四三ウ	樹石か			邵沙		浙江杭州
209	B 四三ウ	倣古四幀		1749	王昱		江蘇太倉
210	B 四四オ			1786	王巖		江蘇蘇州
211	B 四四オ			清、17世紀	項聖謨	1597-1658	浙江嘉興
212	B 四四ウ	松	○	1624	沈春澤		江蘇常熟/江蘇南京
213	B 四五オ	文五峰山水合冊		明	文伯仁	1502-1575	江蘇蘇州
214	B 四五オ	文五峰山水合冊題箋		1834	楊松		江蘇蘇州
215	B 四五オ	文五峰山水合冊跋		明	楊廷樞	1595-1647	江蘇蘇州
216	B 四六オ	(倣査士標)		1863	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
217	B 四六オ	山水(倣倪瓚)			履泰		
218	B 四六オ			19世紀	小曾根乾堂▲	1828-1885	長崎
219	C 六ウ	烹茶図		1494	沈周	1427-1509	江蘇蘇州
220	C 八オ	梅		明	楊補	1598-1657	江蘇蘇州
221	C 八オ	楊補梅図跋		1675	金俊明	1602-1675	江蘇蘇州
222	C 九オ				元銓		
223	C 九オ				張從先		
224	C 九ウ		◎	清	僧普澤		上海
225	C 十オ			清、19世紀	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
226	C 一一ウ	花卉	◎	17世紀	李因	1616-1685	浙江海寧
227	C 一一ウ	李因花卉図跋		17世紀	葛徵奇	?-1645	浙江海寧
228	C 一二ウ	(呉鎮筆意)		1862	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
229	C 一五ウ			清、18世紀	王宸	1720-1797	江蘇太倉
230	C 一五ウ			清、19世紀	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
231	C 一六オ	花卉		1805	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
232	C 一七オ	竹石双清	○	明	倪元璐	1594-1644	浙江上虞
233	C 一九オ	山水		1404	王紱	1362-1416	江蘇無錫
234	C 一九ウ			清	胡湄		浙江平湖
235	C 二〇オ	山水(倣米芾)	◎	清、19世紀	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
236	C 二二オ	山水	○	1808	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
237	C 二二ウ			1831	□□□□		
238	C 二三ウ	竹	○	1636	婦昌世	1573-1644	江蘇崑山/江蘇常熟
239	C 二四オ	梅		1863	鉄翁▲	1791-1872	長崎
240	C 二四ウ	山水(王翬意)	○	1862	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
241	C 二八オ	書		1657	木庵●	1611-1684	福建晉江
242	C 三十オ	山水		清	費晴湖●	[安永頃-1796]	浙江湖州
243	C 三一オ			清、17-18世紀	秦澹か		江蘇南京
244	C 三一オ			明、14世紀	僧德祥		浙江杭州
245	C 三一ウ			清、17世紀	金俊明	1602-1675	江蘇蘇州
246	C 三一ウ	花卉か		明	王穀祥か	1501-1568	江蘇蘇州
247	C 三一ウ	花卉か		清	惲冰		江蘇常州
248	C 三一ウ	書		1867	林雲遠●	1828-? [1863-明治10年代]	広東四会県
249	C 三四オ	山水(倣倪瓚)	○	清	方璜		浙江餘姚
250	C 三五オ	山水		元	倪瓚	1301-1374	江蘇無錫
251	C 三五ウ	菊	○	1715	楊晋	1644-1728	江蘇常熟

(付録つづき)

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
252	C三五ウ	樹石	○	清	楊晋	1644-1728	江蘇常熟
253	C三七ウ	松林泉山水		1865	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
254	C三七ウ			1609	宋旭	1525-?	浙江嘉興
255	C三七ウ	題			姚弘道		
256	C三八ウ	山水		明	惲道生	1568-1655	江蘇常州
257	C三八ウ	山水(趙孟頫意)		1809	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
258	C四〇ウ	山水(天平幽境)	○	1809	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
259	C四四ウ			明	倪元璐	1594-1644	浙江上虞
260	C四六オ	山水		1684	王槩		浙江嘉興
261	C四六ウ	竹石	○	清	周芷岩	1685?-1773	上海嘉定
262	C四七オ	詩画		1866	跡見花蹊▲	1840-1926	大阪
263	C四八オ			1805	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
264	C四八ウ	倣古山水画帖(撫古十二幀)	○	1679	吳歷	1632-1718	江蘇常熟
265	C五一ウ			1866	鉄翁▲	1791-1872	長崎
266	C五二オ	蘭石		清	郭尚先	1785-1832	福建莆田
267	C五二オ			明	程達		安徽歙縣
268	C五二オ			明	程達		安徽歙縣
269	C五二ウ	倣王維雪裏芭蕉図			鉄門		
270	C五三オ			1746	華岳	1682-1756	
271	C五三ウ	書か			江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
272	C五四ウ				汪榮		
273	C五七オ	(呉鎮法)		清	劉躍雲	1736-1808	江蘇常州
274	C五七オ			1801	夏瓘		江蘇崑山/江蘇蘇州
275	C五七オ				珊洲三兄		
276	C五七オ			清か	李良		江蘇蘇州
277	C五七ウ	蘭石	○	清	錢朝鼎		江蘇常熟
278	D一オ				杏江鴻謨		
279	D一オ	菊か		明、17世紀	倪元璐	1594-1644	浙江上虞
280	D四ウ	山水画識五則		清	吳歷	1632-1718	江蘇常熟
281	D五ウ～七オ	山水画帖(撫古十二幀)	◎	清	吳歷	1632-1718	江蘇常熟
282	D七ウ	山水	○	清	石濤	1642-1707	広西桂林/湖北武昌
283	D八オ			1629	程嘉燧	1565-1643	安徽休寧
284	D八ウ	(倣元大家筆意)			白嶽山人汪口		
285	D八ウ	蘭		清	李襄		江蘇揚州
286	D九オ			清	惲寿平	1637-1690	江蘇常州
287	D九ウ			清、18世紀	鄭燮	1693-1765	江蘇興化/江蘇揚州
288	D九ウ	云根四秀		明	唐寅	1470-1524	江蘇蘇州
289	D一五ウ	竹石	○	清	周芷岩	1685?-1773	上海嘉定
290	D一六ウ	山水か(程正揆意)		1795	畢涵	1732-1807	江蘇常州
291	D一七オ	山水		1809	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
292	D一七オ			清	曹瓊		江蘇常熟
293	D一七ウ			1684	王槩	1645-1707	浙江嘉興/江蘇南京
294	D一七ウ	(呉鎮法)		清	劉躍雲	1736-1808	江蘇常州
295	D一七ウ			清	董誥	1740-1818	浙江富陽
296	D一七ウ			清	沈宗騫	乾隆・嘉慶(1736-1820)頃	浙江湖州
297	D一七ウ			清、17世紀	祁彥佳	1594-1683	浙江紹興
298	D一七ウ			清	胡節		江蘇太倉

(付録つづき)

	位置	作品内容	縮図	作品年代	作者	生卒 [来朝時期]	出身/居住地
299	D一七ウ			清	方璜		浙江餘姚
300	D一七ウ			清、17世紀	徐枋	1622-1694	江蘇蘇州
301	D一八オ			1808か	李景黄		
302	D一八ウ	歳寒益友	○	1647	祁豸佳	1594-1683	浙江紹興
303	D一九オ	喬松益壽図	○	清、17世紀	祁豸佳	1594-1683	浙江紹興
304	D一九ウ			明	徐渭	1521-1593	浙江紹興
305	D二〇オ	蘭			陳墀		
306	D二一ウ	山水	◎	清	許尚遠		安徽黟県
307	D二二オ	花か		清	董誥	1740-1818	浙江富陽
308	D二二ウ		○	清、19世紀	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
309	D二三オ		◎	1675か	羅牧	1622-1704	江西寧都
310	D二三ウ			清	王穰		江蘇塩城
311	D二四オ			1767	顧偉器	乾隆(1736-1795)頃	上海
312	D二四オ	題跋		1815	白鎔	1766-1839	北京通州
313	D二四オ	書		1867	金爾珍	1840-1917	浙江嘉興
314	D二六オ	古木寒鴉図		1472	沈周	1427-1509	江蘇蘇州
315	D二六オ	古木寒鴉図題		1514	周天球	1514-1595	江蘇太倉
316	D二六オ	(董其昌意)			李鈺		
317	D二六ウ	四君子画帖か(六図)	○	清、19世紀	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
318	D二七オ	歳寒図、臨文徵明			陸燦		江蘇太倉
319	D二七オ			1867	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
320	D二七ウ	山水(長松古嶽図)	○	1670	祁豸佳	1594-1683	浙江紹興
321	D二八オ	山水	○	1809	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
322	D二八ウ	書		1866	錢子琴●	1834-1883 [幕末-1882]	江蘇無錫
323	D三一オ	山水(傲高克恭)		1690	沈宗敬	1669-1735	上海華亭
324	D三二オ～ 三四オ	蘭(画帖か)	○		陳墀		
325	D三四ウ	竹か		1370	方孝儒	1357-1402	浙江海寧
326	D三五オ			1745	鄭燮	1693-1765	江蘇興化/江蘇揚州
327	D三六オ			1621	僧文石	1552-?	上海松江
328	D三六オ			1484	沈周	1427-1509	
329	D三六オ、 三七ウ	山水画帖か(四図)	○		蒲獻		
330	D三八オ～ 三九オ	書十二点(屏風か)		清、19世紀	江稼圃●	1746-1826 [1804-文政頃]	江蘇蘇州
331	D三九ウ～ 四〇ウ	合作雑画帖	○	1867	王克三●	[1862-1865]	浙江乍浦
332	D三九ウ～ 四〇ウ	合作雑画帖	○	1867	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
333	D四〇ウ	(傲周之冕)			張綸		
334	D四一オ			1629	宋士良		
335	D四二ウ			1865	鉄翁▲	1791-1872	長崎
336	D四三ウ	山水(師王蒙)		1867	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
337	D四二ウ	蘭			同谷子		
338	D四四オ			清、17世紀	查士標	1615-1698	安徽休寧/江蘇揚州
339	D四四オ			清、17世紀	查士標	1615-1698	安徽休寧/江蘇揚州
340	D四三オ			元	古林清茂		
341	D四五オ～ 四六ウ	山水雑画帖	○	1867	徐雨亭●	1824-? [1862-1867]	浙江平湖
342	D四七オ	蘭(画帖か)	○	1800	夏鞏		江蘇崑山
343	D四七ウ	山水(黄公望意)		明	唐志契	1579-1651	江蘇揚州
344	D四八オ	山水	○	1639	張璠	1570-1644	福建晉江

